
封蓮貴

如月皇夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

封蓮貴

【Nコード】

N3772L

【作者名】

如月皇夜

【あらすじ】

代々続く『封魔』の家系の跡取りである愛羅。相棒である空孤の焰を引き連れて、妖でのトラブル解決!! そんな彼らは今日も今日とて色々な事に巻き込まれていく。

妖と人とは心を通わせるのは無理なのか？

オカルトチックな現代風ファンタジー!!

第0夜 登場人物と世界観（前書き）

この小説はフィクションです。

掲載されている人物・施設・団体等は存在いたしません。

また、ファンタジーホラーです。

ところどころ残酷な表現が出てきますので、苦手な方はご遠慮ください。

第0夜 登場人物と世界観

【設定】

主人公

緋守愛羅ひかみ あいら

・ 16歳

・ 女…のように育てられた男

・ 藍色の髪に緋色の瞳

・ 代々続く『封魔』の家系の次期当主候補で、日中は女装を強いられ『女』として生活している

・ 類稀なる才能を持ち、緋守家では『秘蔵っ子』として世間から隠されている

・ 全属性を持ち、闇に対する力が極めて高い

・ 愛刀は封魔の力を持つ『紅蓮貴』

・ 相棒に『空狐』の焰を連れている

相棒

焰ほむら

・ 真名は『焰蓮』（エンレン）

・ 年齢不明

・ 男…と言つか雄

・ 蒼銀の毛並みで金色の瞳

・ 妖狐の中でも最高位の妖

・ 多才であり、また純粹な心を持つ愛羅を気に入り傍にいる

・ 属性は名前の通り『炎』

・ 普段は狐の姿だが、時々人間に化ける

その他（準レギュラー）

緋守翠 ひかみすい

・緋守家次期当主候補で愛羅の実兄だが、本人は家を引き継ぐ気0。
愛羅に全て譲る気満々。優しく、頼りになる兄貴気質。属性は『火』
と『木』

緋守蒼葉 ひかみそうは

・緋守家次期当主候補で愛羅の実姉だが、翠と同様に家を引き継ぐ
気はまったくなく。

愛羅に譲る気満々。一応中立の位置に立つ。属性は『火』と『氷』

緋守紅弥 ひかみこうや

・緋守家次期当主候補で愛羅の従兄弟に当たるが、何かと愛羅に突
つかかるが全て負けている。

愛羅には勝ちたい気持ち強い。属性は『火』と『土』

皇夜 こうや

・『冥府』の生贄にされた青年。腰には菊と桜が彫られた柄の刀を
差している。

水城蓮 みずきれん

・愛羅の同級生で、愛羅を『女』と思い込んでいる自称親友兼アシ
スト。

家は代々緋守家に仕えていたらしい。

【世界設定】

・国名は日本帝国

- ・魑魅魍魎が蔓延っている
- ・妖怪や幽霊が普通にいて普通の人にも見える
- ・現代風なファンタジー世界
- ・この世界では17歳で成人
- ・表御三家（財閥）と裏御六家（暗殺・退魔等）がある

第0夜 登場人物と世界観（後書き）

のらりくらりと書いて行きますので、のんびりとお楽しみください。

第1夜 依頼01

カコーン……

「と、言う訳だ。お前に、その件について任せたい」

「……僕に、ですか。まあ、場所を考えれば、僕が一番適任でしょう。分かりました、引き受けます」

「頼んだぞ、愛羅」

「『緋守』の名に恥じぬよう、頑張ります」

パタン……

「ふう……」

「愛羅、親父さんの話何だつて？」

「焰」

屋敷の奥に位置する居間から出てきた少年 愛羅に話しかけたのは、

綺麗な銀色の毛並みの小柄な狐、焰だった。

金色の瞳に、愛羅の姿を映し見上げてくる彼の口元は不機嫌そうにへの字になっていた。

狐なのに、何処か人間染みたその表情が可笑しくて、小さく笑う。

「何笑ってんだよ」

「いや、焰があまりにも人間染みた顔するから」

「お前と一緒にいるからな、仕方ねえだろ。で、何の話だったんだ？」

笑われたことに少し拗ねた様子を見せながらも再度問う焰に、愛羅は笑みを消した。

「僕が通ってる学校に、最近出るらしい」

「お前が通ってるって…龍神学園にか？」

「うん。何でもここ最近、宿直の先生達が何処からともなく聞こえてくる『旋律』に精神的に参ってるらしい」

「……人間の仕業じゃないのか？」

「ピアノやその他の楽器が置いてある場所は全て施錠済み。人影もなかったみたいなんだよ」

愛羅が先程渡されたのであろう書類に目を通しながら答えると、焰はただ興味なさそうに小さく欠伸を零した。

「で、他の被害は？」

「ない」

「は？」

「だから、ない」

「被害つてもしかして、その旋律だけ…？」

「うん」

肯定するように頷かれて、焰は目を細めた。

「その依頼をして来た奴は俺たちをおちよくってんのか？ たかが旋律ひとつで依頼とは。ほっときゃあ良いだろうが」

「そうもいかないんだ、焰。その旋律を聞いた人は、全員自殺未遂を起こしてる」

「それとこれと何が関係あるんだよ」

「その先生方は、自殺しようとした事を覚えていないらしい。そして、皆口を開いてこう言う」

旋律が、旋律が私を呼んでる！！

「おかしいと思わない？ 彼らの傍にいた人たちは、その旋律は聞こ

えなかったと言っている。
つまり、学校で旋律を聞いた者達にだけ聞こえる旋律」

「……悪霊か」

「今の段階では未だ何とも言えないけどね。けど放っておいたら確実に悪霊になってしまっただろうね。だから、父さんは引き受けたんだ」

「……仕方ねえな、やってやろうじゃねえか」

渋々と言った様子で言う焔だが、目が活き活きと輝いていた。
元々焔は好戦的な性格だ。

暴れられるのが、内心楽しみで仕方ないんだろう。

「けど…僕の通う学校かぁ……」

「何だ？困ることもあるのか？」

ヒュンツと尻尾を振って問う焔は面白そうに目を細めた。
理由を知っているのに聞いてくるかこの狐、と内心毒づき溜息を吐いた。

「僕は、日中動くのは嫌いな。特に学校」

理由は聞かなくても分かるだろうと言いつつとスタスタと自室に戻っていく。

それを追いかける焔の口元は薄っすらと笑みが浮かんでいたのを、
愛羅は知らない。

第1夜 依頼02

龍神学園

文武両道の精神、和と洋の中和を重んじ、いついかなる時も精神統一を掲げる格式高い学園である。

エスカレーター式のこの学園は、幼等部、初等部、中等部、高等部、大学部と施設が分かれている。因みに、ペット同伴が可能と、結構フリーダムな部分もある。

「で、今回事件が起きてるのは高等部らしい」

「お前にぴったりの依頼だな」

「……………煩い、焰」

足元でクツクツと動物らしからぬ笑い声をあげている焰をキツと睨み付ける愛羅は、紺のブレザーとスカートを身に付けていた。

「しかし、ほんと似合うよな女の制服」

「……………僕は着たくて着てるんじゃない、言い付けだから仕方なく着てるんだ!」

愛羅は忌々しそうに己の制服を見下ろした。

彼は立派な男児だ。

いくら顔立ちが女性寄りだろうと、体が華奢だろうと、彼は男。しかし彼の一族は、彼に女装を強要していた。

文句を言いたかったが、当主の言葉は覆すことなど出来る筈がなく、物心ついたときから今まで、日中は‘女性’として過ごさなければならなかった。

「何で女として過ごさなきゃならないんだよ」

「知らん。その事に関しては親父さんに訊くのが一番だろ」

焰はそう言つとピョイツと愛羅の肩に飛び乗った。

「あの人が教えてくれるはずないだろう」

いつだって、肝心な事は言わずスルリと抜けていく父親を思い出して溜め息をひとつ。

「なら考えるのは止めとけ。今は依頼を最優先させるぞ」

「そうだね」

とりあえず現場に行こう、と足を宿直室のある旧校舎に向け進もうとする。

「愛羅」

ガシッと腕を捕まれ、グイッと引っ張られてしまった。

「……おはよう、蓮」

愛羅を引っ張った張本人 水城蓮は、睨んでくる愛羅をものともせず、ニカッと笑った。

彼は、愛羅の唯一の自称親友だ。

「はよ、愛羅。そっちは旧校舎だぜ？」

「ちよつと用があつて」

「倉庫化してる旧校舎に？」

「まあね。それより遅い登校だね、蓮。
朝練は？」

蓮は弓道部に所属していて、毎朝欠かさず朝練に出ていた。
そんな彼が、こんな時間に登校なんて珍しい。

「あー…顧問が入院してさ、今日の朝練無くなったんだよ」

「入院？」

「なんでも宿直室から飛び降りたんだと。
幸い、両足の骨折程度で済んだらしいけど」

「…顧問の先生の名前って何だっけ？」

「確か、柳原拓郎ヤナギハラ タクローウだった気がするけど」

「柳原拓郎…」

確か、渡された書類の犠牲者の中にそんな名前があったな、と頭の
片隅で思い出す。

焰も同じことを思ったらしく、愛羅に視線を向けていた。

「なんだ？また家の仕事か何かか？」

愛羅の家系の仕事を大体は知ってる蓮は、考え込み始めている愛羅に尋ねた。

「ん？ああ、まあそんなところかな」

「そっか、まあ『緋守家』は特殊だしな…。けどあんまり無理すんなよ」

お前は女の子なんだからな、と頭を撫でてくる蓮に、愛羅は苦笑いした。

蓮は、知らないのだ。

いくら愛羅の家系の事を知っていても、愛羅自身の事は、何も知らない。

当たり前だ、愛羅は、何も言っていない。何も話していない。知らないほうが、蓮にとって幸せなのだ、と思っているから。

「…愛羅」

焰の声に愛羅は分かっていると眼で伝え

「蓮、僕は依頼をこなさなきゃならないんだ、だから…」

「分かった、こっちは何とかしてやる」

「ありがとう、助かるよ」

「そのかわり、無茶だけはするなよ」

「うん、約束する」

約束な、と愛羅の頭をもう一度撫で、蓮は校舎に向かった。

それを見送る愛羅の眼には、微かに寂しさが見え隠れしているのを、
焰は見逃さなかった。

けれど、彼は口出しをしたりしない。

これは、本人の問題で、自分が何を行っても意味がないと悟っているから。

「……行くぞ、愛羅」

「うん、とっとと終わらせよう」

愛羅はキッと旧校舎を睨んだ後、中に入っていった…。

第1夜 依頼03

旧校舎

ギィィィィィ…と扉を開くと、奥は薄暗い廊下が続いていた。倉庫化しているだけあって、中は埃が舞い、窓ガラスはひび割れ、破片はその辺に散らばっていた。

「酷い有様だな」

「仕方ないよ、ここは倉庫として使われ始めて20年近くは経つて
るようだし。」

掃除なんてする人、いないんじゃないかな。」

「で、なんでここに宿直室があるんだよ」

最もな問いに、愛羅は苦笑を漏らした。

「前は新校舎にあったんだけど…色々問題が起きてね。
問題を起こさない為に、こっちに移したって聞いているよ」

「問題ねえ…、教師による盗難か何かか？」

「あ…まあ、そんなところかな」

それ以上は口を割りそうにない愛羅に、焰もそれ以上聞きはしな
かった。

「で、その宿直室とやらは？」

「この廊下を進んだ先だよ」

愛羅の指差す方向は、暗闇に満ちていた……。

パリン、パリン。下に落ちているガラスの破片を踏みながら廊下を進んでいく。

愛羅も焰も夜目が聞くから、懐中電灯などはいらない。

宿直室までの廊下には一つも電灯はなく、薄暗い。

「よくこんなところに寝泊りできるな」

「仕事、だからじゃない？」

薄暗い中を進みながら話す二人の顔は真剣な表情になっていた。奥に進むに連れて、空気が重くなり気温も低くなっていく。フワリフワリと空気が愛羅に纏わりつく。

「……靈気が濃いな」

「ここまで濃いとなると……やっぱり悪霊の仕業かな」

「さあな……。ま、大物には間違いないだろうな」

「……それにしても、靈の気配がないよね」

「言われてみれば……こんなに濃い靈気があって気配がないってのはおかしいな」

気配はおろか痕跡も一つとしてない。

これは、おかしい。

霊がいるのなら気配ぐらいあるはずなのだが。

もし仮に霊が一匹もいないとなると、この霊気は何だ。

「調べて見るか……」

すっと懐から取り出したのは、一枚の霊符。

「あいつを呼ぶのか」

「うん、あの子の得意分野だからね」

愛羅は霊符を前に翳すと、スウツと深呼吸をして唱え始めた。

「全てを見透かす者よ、我が命において姿を見せ、我が命に従え
妖鏡・カガミ!!!」

ポツと、霊符が燃え、愛羅の目の前には子供の姿をした少女が現れた。

ウェーブのかかった金色の髪を靡かせ、翡翠色の瞳に愛羅を映し出す。

「久しぶり、マスター」

「久しぶり、カガミ」

「……ここ、不思議なところね。霊気が充満してるのに、霊達の気配がないもの」

「うん…カガミ、その原因を探ってきて欲しいんだ」

「分かったわ、マスター。しっかり調べてきてあげる。だから、マスターは今日は戻ったほうが良いわ」

「え、どうして……」

「どうしても。焰、マスターをお願い」

「分かった」

じゃあ、また後でねマスター、と言ってカガミはフツと姿を消した。

「ほら、愛羅戻るぞ」

「えっ?! ちょ、焰?!」

襟を引っ張られ困惑する愛羅に、早くしろと急かす焰。仕方なく、焰の言う通り旧校舎から出た。

「ねえ、何でそんなに急かすの?」

「……後で話してやる」

そう言って口を閉じた焰にそれ以上何も聞けない。

仕方なく、愛羅は授業に出るべく、新校舎の方へ歩みを進めた。

第1夜 依頼04

夕刻

旧校舎の調査をカガミに任せて、愛羅は屋敷へ戻ってきていた。カガミが調べている間は不用意に現場に立ち入るな、と焔に念入りに言われたうえ、彼は一向に離れようとしなない為、仕方なく現場には立ち寄らずに屋敷に戻ってきたのだ。

「僕も旧校舎を調べたかったのに」

ベッドに座って溜息吐く愛羅を、焔が軽く睨んだ。

「馬鹿か、何の為のカガミだ。あいつが調べている間は大人しくしとけ。」

お前が動いたら、あいつが動く意味が半減するだろうが」

「そうだけど…」

「それにな、あそこには霊気が充満してたんだ。いくらお前でも当てられる可能性はある。」

それを危惧したカガミが忠告してただろ」

焔にそう言われ、朝のことを思い返す。

確かに、彼女には忠告らしきものを言われた。

理由は言わなかったが、そう言う事か、と納得した。

「まあ、二人がそう言うなら大人しくしとくけどさ」

「つて、どこに行くんだ」

キシツとベッドから立ち上がって部屋から出ようとする愛羅の肩に急いで飛び乗る焰。

愛羅はフツと口元に笑みを寄せ他だけで何も言わず、スタスタと部屋を出て廊下を進んでいく。

「おい、愛羅」

焰が声を掛けても、愛羅は応えない。

真っ直ぐ続く廊下の奥をじっと見ながら歩みを進めるだけ。

そんな彼にこれ以上声を掛けても無駄だと悟った焰は、納得いかにいまま口を閉じ彼の首元に巻きついた。

目的地である部屋の前まで来ると、愛羅はすつと真剣な表情を浮かべ、トントツツと軽くドアを叩いた。

「誰だ？」

「愛羅だよ。兄さん、少しお話があるんだけど、いい？」

「いいぜ、入ってこいよ」

部屋の主の許可を貰い、キイツとドアを開けて入る。

中で待っていたのは、ベッドに座った愛羅と同じ藍色で癖っ毛の髪、右目を包帯で覆った青年 緋守翠。

愛羅の実兄であり、緋守家次期当主の有力候補。

しかし、当人は家を継ぐ気はないらしく、愛羅に全て譲ると豪語しまわってる、少し変わった人だ。

「どうした、お前がここに来るなんて珍しいな」

そう言いながらも嬉しそうな様子を見せる翠に、愛羅も頬を緩ませる。

しかし、ここに来た目的を思い出し、すぐさま真剣な表情に戻した。

「ちょっと兄さんに聞きたい事があった」

「聞きたい事？」

本当に珍しいな、と翠は首を傾げながらも、話を聞く体制をとった。

「うん、兄さん、確か霊属性について詳しくあったよね？」

「うん？お前だって詳しいだろ」

なんたって、お前はこの家の秘蔵っ子なんだから、と茶化す翠を「兄さん」と一言咎め、話を続ける。

「僕の知識じゃ、お手上げなんだ」

「お前でお手上げて…」

一体何だよ、と先ほどまで穏やかだった目が真剣みを帯びる。

「今、依頼を受けてるのは耳に入ってるよね？」

「ああ、確かお前が通ってる学園だっけか。」

依頼内容を見た限りじゃ、そう難しいものじゃないと思うんだがな」

「依頼内容は、ね。実は、今日現場に下見に行ったんだ。そこでち

よつとおかしなことがあって」

「おかしなこと？何があった？」

「靈気が酷く充満してるんだ。なのに、靈の姿どころか、靈の気配すらない。」

今力ガミに調べさせて入るんだけど…兄さん何か知らない？」

「……靈気の質は？」

「え？」

問われた問いに、一瞬動きを止める。

しかし翠はそんなことは気にしないで先を促すように愛羅を見つめた。

「…靈気にしては冷たくはなかった。重み…圧力はあったけど」

「…成る程な」

納得した、とでも言うように呟く翠に、愛羅は首を傾げた。

「兄さん、何か知ってるの？」

「愛羅、それは、もう靈気と呼べるものじゃない」

「…びびりて〜」

「簡単に言えば、靈気と妖気の間か」

「…ますます分かんないんだけど」

時々こうして遠まわしな言い方をする翠。

どついう意味があるのか、愛羅には検討はつかなかったが、こついう言い回しをする翠は、どことなく畏怖の念を感じさせる雰囲気纏う。

「つまりだ、そこにいるのは、ただの霊じゃないってこと」

「え、それってつまり……」

「そつだ」

ニイツと不敵な笑みを浮かべて、翠は告げた。

「怨霊だ」

第1夜 依頼05

「怨…霊…」

「そつだ。悪霊が悪化したもの、妖に近くなったもの…もう、霊じゃないな」

翠はベッドから立ち上がり、本棚から一冊の本を取り出すと愛羅に手渡した。

「これは…？」

「怨霊に関する資料だ。怨霊つつつても様々だからな。少しは読んどけ」

「ありがとうございます」

渡された本をギュツと抱き締め嬉しそうに笑う愛羅に、翠も穏やかに笑う。

「じゃあ、僕は部屋に戻るね」

「ああ、あんまり無理すんなよ」

「分かってるよ、……ありがとうございます」

パタン…と部屋へ戻る愛羅達を見送る翠の傍に、フツと手乗りサイズの少女が姿を見せた。

横にポニーテイルされた若葉色の髪を揺らし、紅玉の瞳は心配そう

に揺らめいている。

「翠様」

「木蓮か」

木蓮、と呼ばれたその少女は、差し出された翠の掌に降り立つと、不安げに見上げた。

「宜しいのですか、あの事をお話にならなくて」

「構わないさ。あいつのことだ、自分で気付くだろう」

「……………そうですね」

「ああ。……………頑張れよ、愛羅」

*

部屋に戻った愛羅は、早速手渡された本を開いた。その本は靈属性についてこと細かく書かれた資料をまとめたものだった。

「怨靈…怨靈…」

ぺらぺらと捲くりながら目的の資料を探す。

「あ、あった」

目的の資料を見つけて、ページを捲る手を止める。
そこには『悪霊』と『怨霊』について書かれていた。

「『悪霊』は未練の楔によって地上に縛られた霊が負の感情を取り込むことによつて生まれる……」

「悪霊はいいから、怨霊の方を読めよ。そつちが本題だろ」

「分かつてるよつ。えーと、『怨霊』には二種類の発生原因がある。一つは『悪霊』が更に負の感情を飲み込みながら長い月日を経たもの」

「あー確か聞いたことあるな。確か悪霊は浄化可能だが、怨霊にまで悪化したら消滅させるしかないって」

「うん、怨霊はもう人の心を喰い尽くされてるからね。魂の消耗が激しくて、正氣に戻す衝撃に耐えられないんだ」

「で、もうひとつの原因は？」

焰に促され、愛羅は続きに眼を走らせる。

「もう一つは『故意』に負の感情を詰め込まれたもの。
これは対象が『悪霊』ではなくても短時間で『怨霊化』できる……
つて霊を怨霊に出来るの？」

「ああ、出来るぞ。かなりの霊力と技術が必要な危険な術だがな」

「危険…なの？」

「ああ、大半の霊力を使うからな。下手をすれば生命力も削られる。禁術の一つの筈だ」

「禁術か……。あ、この二つの判別方法が載ってる」

「どれだ」

「1111」

資料を覗き込む焰に、資料のある一部を指差してみせる。

「自然に怨霊になった場合、霊気は一段と濃くなり姿を見せる事が稀である。普段は物や建物で深く眠りにについているものが多く、発見しにくい。

故意に怨霊になった場合、冷気が一段と濃くなるのに加え、多少妖気に変化し始める。こちらも姿を見せるのは稀であり、普段は眠りにについている者が多い。ただし、故意に怨霊化した者の近くには、その証拠である陣が描かれている」

「成る程な…、翠がこの本を前に渡した訳はこれだったか」

「うん……今回の依頼に、術士が関わってる可能性があるって事だね」

「まだ何とも言えないが、カガミの調査結果次第だな」

焰の言葉に同意するように頷く。

もし、仮に術士が関わってるとしたら、厄介な依頼だ。

「…厄介な事にならないと良いけど」

窓から外を眺めながら、愛羅は深く溜息を吐くのだった…。

第1夜 依頼06

カガミは翌朝になっても帰ってこなかった。

調査が難航しているのか、それとも何かあったのか。

今回、分からないこと尽くしだ、と愛羅は深く溜息を吐いて旧校舎を見上げた。

昨日は蓮に見つかったしまったから、と早朝に門を越えてきたのだ。

「愛羅、微かだが…靈気が濃くなってるぞ」

「……この気配は、カガミのものじゃないな」

と言うことは、ここにいる何かが成長したのか。

何処か不穏な雰囲気醸し出す旧校舎を睨みあげる。
そのとき

ヒュッ

グサグサッ

どこからともなく放たれた短刀を、後ろに軽く避けた。

ギリリ、と朝日を浴びて光る刃には梅の紋様が。

「……紅弥か」

「ふんっ、やっぱり避けたか」

ガサツと茂みから出てきたのは空色の髪に紅眼の青年。

悔しそうに舌打ちして、地面に刺さった短刀を抜き、鞘に収めた。

緋守紅弥：愛羅の従兄弟で、彼もまた次期当主候補だ。

「いきなり攻撃とか…相変わらずやるのがせこいね、紅弥」

「せこい？これも戦法の内だろう」

「そう？まあ、僕相手で良かったね。一般人だと、確実に当たってたよ」

「ふん、俺は素人に投げる馬鹿じゃない。お前だと知ってるから投げたんだ」

ギンツとキツク睨んでくる紅弥に、やれやれと頭を抱えた。

この従兄弟は、何が気に入らないのか、事ある毎に絡んでくる。

何が目的なのか分からないが、どうやら等主の座が欲しいというわけではないらしい。

毎度の如く絡んでくる彼に慣れつつある愛羅だったが、今は関わってる暇はない。

正直言えば、邪魔以外何者でもなかった。

「で、一体用は何？」

「お前、ここの依頼を受けたんだってな」

「…それが？」

「俺も、ここの依頼を受けた。これがどういう意味か、分かるよな？」

意味有り気に笑う紅弥に、愛羅は物凄く嫌そうな顔を見せた。

相手の言いたい事が、分かったからだ。

「…また、あれをやる気？」

「そうだ、この依頼、どちらが早く解決できるか勝負だ」

ああ、面倒な事になった…と愛羅は深く溜息を吐いた。
焰も、呆れた様に紅弥を見やる。

「…勝手にすれば？僕は、君に構ってる暇はないんだ」

投げやりな愛羅の返事にムツとするも、紅弥は絶対勝つ！！と言いつつ、新校舎の中へ入っていった。

「一体何しに来たんだ、あの餓鬼」

「さあ…？大方、またジャレに来たんじゃない？」

今はそんなこと構ってられない、と愛羅は旧校舎に向き直る。

旧校舎は、依然として濃い靈気が渦巻いていた。

「行こう」

帰ってこないカガミも心配だ、と一歩一歩旧校舎の中に入ってく愛羅達。

旧校舎は、愛羅達が完全に中に入ると、バタンツと完全に口を閉じた…。

第1夜 依頼07

パキンッ

旧校舎の中は昨日と変わらずガラスの破片が床に散らばり、窓ガラスは割れていた。

あれから人が訪れた様子は見られない。

ただ、昨日に比べ、霊気が濃くなっているのは、肌で感じた。

「まず、カガミを探さないと……」

「……カガミの気配、分かるか？」

ヒョイツと愛羅の肩に乗りながら、焰は問う。

愛羅は、眉を顰め、暗闇を睨みつけた。

「……ここにある霊気に、消されてるみたいだね。全然、カガミの気配を感じ取れない」

これじゃ探しようがない、と愛羅は小さく呟いた。

焰も同じ意見なのか、ヒョンッと尻尾を一振りして、暗闇を睨む。

「……あいつ、呼んだらどうだ？」

「……あの子を？」

焰の提案に愛羅は考え込んだ。

確かに、未だ状況が分かっていない中二人だけで行動するのは危険だ。

焰の言い分は正しい…が。

「焰、あの子と仲悪いんじゃないかった？」

「……この際、我慢してやる。呼べ」

ムスツとして言い張る焰に、ホントかなあと思いつつも呪符を取り出し、前へ翳す。

「月の加護を受けし者よ、我の道を示し、力となれ 妖月・月花！」

ポツと呪符が燃え、現れたのは白銀の髪に金色の瞳の少女。

「久しぶりね、マスター。中々呼んでくれないから、忘れられたかと思っただわ」

「ごめんね、月花。忘れてたわけじゃないんだよ」

「知ってるわ、マスターは優しいもの。どうせ、その獣が呼び出さないようにしてたんでしょ？」

スツと眼を細め、焰を睨みつける月花に、愛羅は苦笑を零すしかなかった。

「勝手な言いがかりは止めて貰おうか、青二才が」

「まあ、獣が何て口を聞いているの」

「はっ、チビが粹がるなよ」

「なっ、失礼にも程があるわよ?!」

「何だと?!」

「はいはい、二人ともストップ!」

口喧嘩が激しくなりそうな二人の間に入り、喧嘩を止める愛羅。だから、月花を呼び出すの躊躇ったんだよ…。

この二人、顔を合わすと口喧嘩が絶えない程仲が悪い。その仲裁に入るのも中々骨が折れる。

「そうね、折角呼んでもらったんだもの。喧嘩なんて馬鹿な真似してる暇、ないわ」

「それはこっちの台詞だ」

「二人とも、本当に止めてくれる?今は、そんなことしてる場合じゃないんだ」

なっ、と有無を言わさない笑顔を向けられ、月花も焰も口を閉じた。それを確認して、愛羅は月花に事の次第を話して聞かせた。

「つまり、調査に出たカガミが帰ってこないうえに、この霊気である子の気配が読めないってことね?」

「うん、カガミだけじゃない。ここには霊気があるだけで気配は感じ取れないんだ」

「まあ、これだけ濃い霊気なら、気配を消すことは可能でしょうね

……。分かったわ、私はあの子の気配を探して辿れば良いのね？」

「頼めるかな？月花しか出来ないんだ」

「勿論よ、マスターの為なら喜んで力を貸すわ」

ニツコリと嬉しそうに笑った月花は、ポケットから黄色い粉が入った小瓶を取り出すと、キュポンツと蓋を外し、粉を振りまいた。すると、振りまかれた粉は、操られたように一本の道を作り、奥へと続いていった。

「この粉を辿れば、あの子の元に辿りつける筈よ」

「ありがとう。じゃあ、行こうか焰、月花」

愛羅は道筋のように床に落ちた粉を辿りながら奥へ向かった。その後を、焰と月花も追う。

パキンッ

「……………」

その後ろに、怪しい影がたっていたとも知らずに…………。

第1夜 依頼08

月光の撒いた粉はずっと奥に続いていた。

それを辿るように奥へ向かう愛羅達に、生暖かい風が纏わりつく。

「一体どこまで続いているんだ…」

「校舎はそんなに広くないはずなんだけど…」

「ここにいる何かが、亜空間に繋げてるのよ。多分、もうここはあの建物の中じゃないわ」

気をつけてねマスター、と月光が心配そうに愛羅に寄り添った。

周りは相変わらず暗闇で、粉の道だけが唯一光り輝いていた。

一体どこまで続いているんだろう、と終わりの見えない暗闇の中を、ただひたすら進んだ。

すると、少しして淡い光りが見えた。

「あれは…」

「カガミだわ!!」

月光は一目散に光に向かって飛んでいった。

愛羅たちも後を追う。

「月光…っ!!」

月光に追いついた愛羅達が見たものは、蜘蛛の糸のような物に絡みとられて気を失ってるカガミだった。

彼女なりに抵抗したのか、あたりには鏡の破片が散らばっていた。

「一体何があつたの…?!」

「…愛羅、この糸…よくみて見る」

「糸…?」

焰に言われ、糸を手にとってじっとみて見ると、微かに青い光りを纏つてるのが見えた。

「これは…封魔の術式…?」

「マスター!!早く、早くカガミを!!このままじゃこの子が消えちゃうわ!!」

「あつ、うん!!」

チャキツと短剣を取り出して、鏡に纏わりついている糸を切り落とすしていく。

ジユウウツと焼ける音と共に糸が消えていく。

「カガミ、カガミ大丈夫?」

腕の中のカガミに声を掛けると、ピクツと鏡の体が反応したのに気付いた。

「一先ずここを出るぞ!!」

「わかった。月花、案内を頼む」

「任せて、マスター!!!」

月花を先頭に、亜空間から抜け出そうと来た道を戻る愛羅の腕の中では、カガミが小さく呼吸を繰り返していた。

「…っ、まだなのか青二才?!」

「もう少しよ猛獣!!!」

パリンッ

何かが割れる音共に、目の前にはグランドが見えた。どうやら、亜空間から抜け出せたみたいだ。

「それよりカガミツ!!!」

彼女は無事かっ?!と腕の中に視線を落とすと、先程より顔色は良くなっていた。

「マスター、大丈夫よ。だいぶ力を吸い取られちゃって寝てるけど、命に別状はないわ」

月花も安心したように、カガミの髪を撫でながら告げた。

「そうか…良かった」

「けど、これで何者かが関与してることは分かったな」

「うん、どうやら、この件は思ったより厄介だね。…今日は、もう

帰ろう」

「マスター、学校は？」

「　　後で蓮にでも連絡する。帰るよ、月花、焰」

そう言ってスタスタと学校から出て行く愛羅の後を急いで追う月花と焰。

「あの子が　　緋守愛羅……………」

その様子を、誰かが見ているとは気付かずに　　。

第1夜 依頼09

一度屋敷に戻ってきた愛羅は、すぐに自室に向かった。
途中誰かに呼び止められた気がしたが、カガミのことではいっぱいで足を止めはしなかった。

バタンツ

扉を勢いよく閉めるとカガミを布団の上に寝かせた。

「カガミ……」

「マスター、大丈夫よ。さっきも言ったけど、魔力を大量に放出して気を失ってるだけ。力が戻れば、元気になるわ」

「……だが、カガミは高位の妖魔だ。魔力もかなりあるはずだぞ？」
焰の言う通り、カガミは妖魔の仲でも高位に属し、それに伴って魔力の量も半端ではない。
普通なら、こんな風に倒れるなんて事態は起こらないはずだ。

「……あの糸だ」

ボソリと呟かれた言葉に焰と月花は真剣な顔つきになった。

「封魔の術式が施してあったな」

「それも……かなり強力なものね」

「……封魔の術式は術者の力によって5段階位に分けられる。…あれは、多分かなり高等な術式だ」

「…術士が関わってる、厄介なことだな」

焰は溜息を深く吐きながら寝そべった。

「焰？どうしたの？」

寝そべった焰を心配そうに見つめる愛羅に、焰は尻尾を軽く振り

「少し彼ただけだ」

ちよつと寝る、と寝てしまった焰に呆れた様に笑う。

「マスター…今回の件、あの方達を呼んだほうが良いわ。悔しいけど、私やカガミじゃとても太刀打ち出来ない。私たちは、役立たずよ」

「そんなことない、月花もカガミも十分力になってくれたよ」

悔しそうに、そして悲しそうに告げる月花の頭をヨシヨシと撫でながら微笑む。

彼女たちは十分力になってくれた。

だからこそ、今回“術士”が関わってるのが分かったのだから。

「今日はありがとう。月花、カガミを連れてゆっくり休んで」

「マスター…ありがとう」

嬉しそうな笑顔を浮かべ、カガミを連れて還った月花を見送った後、ゴソツと綺麗な赤、緑、蒼、黄、紫の5種の球が詰められたペンダントを取り出した。

「……我希う、血の契約の元に我の前に姿を現し、我に力を与えよ
!!!」

呪を唱えペンダントを前に翳すと、パアアツとペンダントが光り、2人の少年と3人の少女が姿を現した。

「はあい、愛羅。久々ねえ」

赤髪で紅眼の少女はニカツと笑って。

「僕達を呼ぶ、と言うことは、今回何か厄介なことでも?」

緑髪で若葉色の瞳の少年は、コテンと首を傾げ。

「俺達全員呼ぶほどのことなのか?」

蒼髪で氷蒼の瞳の青年は腕を組み。

「私達、頑張りますよ」

金髪で金眼の少女はやる気満々で。

「……愛羅、やっと呼んでくれた」

紫銀髪で紫眼の少女は嬉しそうに。

それぞれがそれぞれの表情で愛羅の前に立っていた。

「皆、来てくれてありがとう。今回、かなり高位の“術士”が関わって厄介なことになってるんだ」

力を貸してくれる？と愛羅が問えば、5人とも「勿論」と快く言った。

第1夜 依頼10

「それで、一体何があったの？」

赤髪の少女は首を傾げながら問う。

他の子達も同じ気持ちだったようで、じっと愛羅を見つめた。

「実は…今回の依頼で、現場にカガミを向かわせたんだ」

「カガミ…確かその子は琥珀の属性の子ね」

「はい、確かにあの子は私の属性ですよ、紫苑。確か、探索が得意な子です」

紫銀髪の少女 紫苑の言葉に、金髪の少女 琥珀はコクリと頷いた。

「琥珀の属性で『探索』ってことは…調査をさせてたのね？」

「うん、紅林。今回ちょっと変な依頼だったからね、先にカガミに調べてもらってたんだ」

赤髪の少女 紅林に軽く頷いて、事の次第を話した。

霊気の事。

亜空間の事。

カガミの事。

術式の施された系の事。

話が進むにつれて、5人の顔に真剣みが帯びてくる。

「…それは、確かに厄介だね。術式の糸が張られていた、ってこと

はその亜空間は人の手によるものだ。自然に出来たものなら、そんな畏みたくないものはないから」

「翡翠、人が亜空間なんて作れるの？聞いたことないんだけど」

「作れるよ。かなりの技術と霊力を必要とするけど。ね、湊」

「ああ。ただし、生半可な力じゃ出来ないし、それ相応の反動を受けられるかな」

緑髪の少年 翡翠に同意を求められ、蒼髪の少年 湊は軽く頷いた。二人が口にした事实に、愛羅は眉を顰めた。

あれが人間の手によって作られた亜空間なら、何故あんなところに作られた？

そもそも何の目的で亜空間なんて作ったんだ？話を聞く限りじゃ、リスクも高そうなのに。

疑問が疑問を呼び、ますます眉間に皺が寄る。

「愛羅ー、眉間に皺が寄ってるわよ」

「だって、わからない事尽くしなんだ」

「まあ、普通は人が亜空間なんて作りませんからね。亜空間は一つの隔離された世界ですし」

「……亜空間を作らないと出来ない事をしようとしてる、とか」

ポツリと、紫苑から放たれた一言に、全員の動きが止まった。全員の視線は、紫苑に向けられた。

「紫苑、今なんて……」

「人が、リスク覚悟に亜空間を作る理由はただ一つ……その術士、禁術を発動させるつもり」

「!!!」

愛羅は眼を見開いた。

紫苑の言葉に驚いたのもあるが、まさか、身近で禁術を行うのに遭遇なんてするはずがないと、何処か思っていたからだ。

「……確かに。禁術を発動させるなら、亜空間以上に適した場所はないよ。周りに影響も出ないし、何より感知されない」

「人知れず禁忌の術を行うことが出来る、最適な環境だな」

翡翠も湊も、紫苑の言葉に同意するように告げた。

「……本当に、厄介な事になったな……」

6人の様子を薄っすら目を開けて見ながら、焰は小さく呟いた。

第2夜 神の子01

「相手が術士…しかも、禁術を行ってる可能性が高い…となると」

「私と琥珀と紫苑が有利ね」

紅林の言葉に、4人も軽く頷いて同意を示す。

「俺は物理系は良いが、魔術系は苦手だからな。そう考えると紅林や紫苑の方が適してる」

「僕は補助といっても回復や異常状態系だから、探索系の琥珀の方が術式を見つけやすいと思う。琥珀も、回復系の術は少し使えるし」

湊と翡翠はそう言っただけで愛羅を見上げる。

愛羅も、2人の言いたいことは分かっている為、首を縦に軽く振った。

「でも、湊と翡翠にも控えて欲しいんだ。今回の件は、本当に読めないからね。何かあってからじゃ遅いし」

「了解。俺と翡翠は、その首飾りの宝玉の中で待機しとく」

「必要になったら名前を呼んで？そうしたらすぐに出てくるから」

「うん、わかった」

愛羅が頷いたのを見て、湊と翡翠はスウツと姿を消した。

否、首飾りの宝玉の中に入っていった、という方が正しい。

「これからどうするんですか？愛羅」

琥珀の問いに、愛羅は少し考える素振りを見せ

「今夜、姉さんが帰ってくるんだ。術式に関しては、姉さんの方が詳しいから訊いてみる。それまでは待機だね。なにより、さっきまで亜空間にいたから、焰も疲れてるし」

床に寝そべった焰にちらりと視線を移して愛羅は言った。

焰は「少し疲れただけ」と言っていたが、誰の目から見てもかなり体力を消耗しているのが分かった。

彼の意地っ張りな性格を知っている愛羅は口に出して言わないが、彼がここまで無防備になることは珍しいことだ。

大切な相棒である彼に無理はさせたくない、それが愛羅の答えだ。

「……分かった。明日、動くのね？」

「うん。紫苑、多分、今回の件は君にかなり負担を掛けるかもしれない。ごめんな」

「謝らないで。私、愛羅の役に立てるの、嬉しい」

ふんわりと笑う紫苑に、愛羅もふつと微笑を零した。

そんな様子に、紅林と琥珀は驚いたような、嬉しそうな複雑な表情をしていた。

「ねえ、琥珀。紫苑があんな風に笑うの見たの、久しぶりじゃない？」

「はい。…紫苑が笑顔を見せるのは、愛羅だけですから」

そして愛羅に呼ばれたのも、本当に久々だから。
それぞれの属性の頂点に立つ自分たちは、異界ではいつも一緒に行動しているが、紫苑がこんな風に柔らかく笑うことなんてなかった。愛羅の存在は偉大ね、と紅林は笑った。
そうですね、と琥珀も嬉しそうに笑った。

「紅林？琥珀？なに笑ってんの？」

何か面白いことでもあったのか？と聞いてくる愛羅に、紅林と琥珀はクスクスと笑って「なんでもない」と返した。
不思議に思った愛羅だが、深くは追求しなかった。
大事なことなら彼女たちが黙ってるなんてことはない、と信じてるからだ。

「じゃあ、姉さんが帰ってくるまで今までのことをまとめようか」

愛羅のその言葉に3人は集まって、今までのことをまとめ始めた。
。

第2夜 神の子02

夜、愛羅は姉である蒼葉に会う為に離れにきていた。

緋守家の長女であり、やはり次期当主候補であるはずなのだが、彼女も翠同様当主の座には興味なく。

一番下の弟である愛羅に譲ると公言し、母屋ではなく離れで生活している。

本人曰く「離れの方が傍観者として丁度良い」らしく、滅多に母屋にはこない。

会いたければ会いにこい、が彼女の言い分だ。

コンコンッ

「姉さん、僕、愛羅です」

「愛羅？入っておいで」

姉の許しを貰い、離れに入った愛羅を待っていたのは藍色の長い髪を後ろの方で緩やかに結った緋色の眼の少女。

彼女こそが愛羅の姉であり、術式のエキスパートである緋守蒼葉その人だ。

「お前が私を訪ねて来るとは珍しいね。何か困り事でもあったかな？」

何処となく独特な喋り方で話す姉に、愛羅は一連の事を話した。

愛羅の話が無言で聞いていた蒼葉の眼がスウウウツと細められた。

それに気付いた愛羅は、やはり今回の事件は複雑なものなのだと内心溜息を吐いた。

「…話は分かった。で、愛羅…お前はこの事件どう読む？」

「…まだ調査し始めたばかりな上、分からないことも多いので確信は持てませんが…。今回の件は、術士が関わっている可能性が非常に高いと思われます。それも、カガミを封じるほどの力を持ち、亜空間までも生み出すことが出来る…かなりの使い手でしょう。正直、今回の事件は軽いものじゃない」

愛羅の言葉に、蒼葉は満足げな笑みを浮かべ、手に持っていた扇をパチンと閉じた。

「ふむ…流石私の弟だ、着眼点が良い。お前も気付いている通り、カガミを封じるにはかなりの力が必要だ。アレは戦闘能力は低いが高位の妖魔。一筋縄では動きを止められん。そして亜空間…。これは高位の術士でも中々難しい。作るのに多量の霊力・妖力を必要とするからな。もし、巧く作れたとしても…作った当人は霊力を根こそぎ使った状態、当分は霊力も戻らない」

「けれど、今回亜空間を作ったであろう人物は、封魔の術式も施してました」

愛羅が眉を顰めると、蒼葉も軽く頷き言葉を続ける。

「それだ、愛羅。いくら高位の術士でも亜空間を作った上、強力な封魔の術を施すのなんて不可能。もし出来るとしたら」

「出来るとしたら…？」

「我ら緋守の血筋の者…それも直系、早く言えば、我ら姉弟か…我

らと同様の力を持つ残り2家の者ぐらいだな」

蒼葉のその言葉に、愛羅は眼を見開いた。

「残り2家…と云つと、氷季家ひむらさと地藤家じとうですか？」

「そう、氷季と地藤も我ら緋守と同等の力を持っている。しかも、当主格となれば尚更、な」

「ですが…その2家が今回の件に関わっていたとして、何かしらメリットがあるとは思えないんですが」

確か、その2つの家系は利益無しには動かないはずでは？と問う愛羅に、蒼葉は少し考え込む様子を見せ

「ふむ…その辺は愛羅、これからの調べ次第で分かってくるのではないか？」

「……………そうですね、今現在の段階では分かりませんが、調べると何か分かるかもしれません。姉さん、今日はありがとうございました」

「いや、また何か助言が欲しければ訪ねて来ると良い。お前は私の大事な弟だからな、助言くらいはしてやろう」

そう言つて柔らかく笑う姉に愛羅は軽く礼をして離れを離れた。

愛羅を見送つた蒼葉の元に、スウツと全身を黒で包んだ青年が姿を見せた。

「蒼葉」

「影羅^{えいら}、どうだ何か分かったか？」

「まあ色々な。今回、あいつが関わってる件：紅弥の坊主も受けたらしい」

「おや…、あの子もねえ…。まあ、父上共も早急に解決したいのでしよう。あそこの地にはアレがいるから」

「アレ、な。愛羅には言わなくて良いのか？」

「あの子は己で気付くだろうよ。私が教えては意味がない。しかし…アレのいる地での亜空間作成…やはりかなりの実力を持つ術士が関わってるのは確かだな。」

氷季か、地藤か…どちらかの当主格か、はたまた両方か」

「厄介な事になったな」

「まあ、あの子なら上手く乗り越えられるだろう」

そう言って、蒼葉は意味深な笑みを浮かべた。

第2夜 神の子03（前書き）

今回、話が進むに連れて流血・グロ表現が出てきます。

苦手な方は回避をお願いします。

読んだ後の批判等は受け付けませんので、ご了承ください。

第2夜 神の子03

その夜、夢を見た。

辺りは薄暗くはつきりとは見えないが、場所はどつやらあの旧校舎のようだ。

「…事件を深く考えすぎてるからこんな夢見るのかな」

夢だと言つ自覚はある。

寝ているような覚めているような、不思議な感覚があるから。それにしても…夢に見るほど、今回の依頼にのめり込んでいるか。眠る時くらいはゆっくり寝たいんだけど、と愛羅は小さく溜息を零す。

…す…て

「…？」

何か聞こえたような気がして辺りを見渡すが、誰もいない。空耳か、と先程のことを頭から消そうとすると

…す…て

「まだする…」

一体どういうことだ、と眉を寄せる。

これは、夢だ。

夢のはず、だ。

深く考える必要はないと思うが…。

助けて!!!

「!!!」

はっきりと聞こえた「助けて」に、愛羅は声の聞こえた方向へ走り出す。

暗闇の中、はっきりと見えない校舎を、止まらない「助けて」の声を辿るように走る。

ピチャッ

又ルッ

「?!」

足元に大きな水溜りがあるらしい。

暗くてよく見えないが、かなりの規模だ。

「(何だ…?鉄の匂い…?)」

まさか…と嫌な予感がするも、首を振って頭から追い出す。

その時、パチツと電灯がつく。

眩しさに眼を細め、目が明るさになれた頃、視線を下に移す。

「!!!!!!!」

水溜りだと思っていたものは、廊下一面に広がった紅く怪しく光る血溜りだった。

嫌な予感が当たった、と愛羅は唇を噛む。

「さっきの声は、この奥から…」

パチャツパチャツ

水音を立てながら、血の海の上を歩く。

血の匂いと色に悪酔いしそうになりながらも、何とか突き当たりの部屋に辿り着いた。

「ここに…声の持ち主が…。無事だと良いけど」

まさかこの血の持ち主じゃないよね、と思いながらドアに手を掛ける。

キィ…

部屋の中は真つ暗だった。

愛羅は手探りで、電気のスイッチを探す。

パチンツと電気がつくと共に目に入ったのは…血の海の中、その血で体を濡らした少年だった。

「!?!?!」

ぐうつと吐きそうになるのを押さえ込む。

これは酷い。

青年は大体15、6で和服を着ていた。

「一体、これは…」

夢であるはずなのに、リアルな感覚。
夢のようで夢じゃないこの感覚は見覚えがある。

「まさか…過去視？」

「正解」

突然聞こえてきた声にバツと振り向くと、そこには先程見た青年の姿が。

「まさか…あれはあなたの…」

「そうだよ。流石だね、緋守家次期当主。まさか、俺の過去を視れる奴がいるとは思わなかった」

「あなたが、これを僕に見せてるんじゃないの？」

「まさか。確かに、君の夢を介して君に会いには来たけど、自分の過去を見せるなんてしない。
君が俺の過去を視た、それは君自身の力だ」

「あなたは一体…それに、何故僕に会いに？」

「俺のことは知ってるはずだ、愛羅。何度となく、俺の話聞いた事があるろう？」

「あなたの話を…？」

青年の言葉に、記憶を辿る。

そして、辿りついた一つの記憶。

「あなたはまさか……冥府の神子?!」

第2夜 神の子04

「まさか、あなたが…あの有名な『冥府の神子』…?!」

「へえ、そんな風に呼ばれてるんだ？昔は『死神』だの『冥府の鬼人』だの呼ばれてたのに」

目の前でおかしそうに笑う青年に、愛羅は冷や汗を流す。

ケラケラと笑う彼は、傍目から見たら普通に見えるだろう。

しかし、放たれる『気』が凄まじい。

腕一本、いや指一本も動かすことを阻まれる。

彼の膨大で圧倒的な『気』に飲まれる。

「…君は、本当に当主に相応しい器の持ち主だね」

冷や汗を流しながらもどうにか立っている愛羅に、青年は眼を細め告げる。

「俺を初めて見て倒れなかったのは、ほのか洗以来だ」

「じい様も、あなたを見て倒れなかったんですか…?」

「ああ、あいつは俺の気に怯えはしたものの倒れなかった。今の君と一緒にだね。因みに、君の兄と姉は後一步の所で気を失ってたよ」

あの姉と兄が、この気に負けた…。

その事実になかならず衝撃を受ける。

どんな者にも臆することがなかったあの二人が、この気を前に破れたと言うのだから、驚かない方がおかしい。

「…で、あなたは何の用で僕に会いに？」

曲がりなりにも神である相手に不躰か、と思いつつも疑問に思ったことを問う。

青年は、フツと微笑んで手にした扇を広げ口元を隠しながら言った。

「ああ。実は、今君が受けてる依頼についてなんだけど」

「依頼…についてですか？」

「そう。さっき、君が見た通りここはかつて俺が冥府の生贄として殺された…儀式が行われた場所なんだ。その上にこの校舎が建ってしまったが、校舎を取り壊せば儀式の痕跡が生々しく残ってるのを確認できる」

「儀式が行われた場所…生贄を捧げた場所…まさか…!!」

「分かった？ここは、『禁忌の術』を行うのに、最も適した場所。亜空間まで作ってるみたいだから、『禁忌の術』発動させる為に用意された空間だと言っても良い。だからこそ、俺は君の所に来た。『禁忌の術』を止める手助けをする為に」

「何故、あなたが…」

確かに、禁術を発動させられるとここ一帯の土地が歪み、均律が崩れる。

それは避けたいことだが…。

ここに存在しているとはいえ、この土地神ではない目の前の彼に

は禁術など直接の影響はないはずだ。

「言っただろ？ここは俺が生贄に…今の『父親』の子になった場所。だから、この土地は神聖な場所になる。この土地はね、冥府とも深く繋がってるんだ。だから、禁術なんて発動されたらあちらの世界にも歪みが来てしまう。そうなれば、『父さん』の仕事が増えちゃうからね。だから、それを止めたいんだ」

成る程、この地は冥府と繋がっているから『向こう側』にも影響を及ぼすのか。

愛羅は納得したように、小さく頷いた。

禁術の影響は『向こう側』でも脅威になる。

だからそれを阻止する為、彼は『使えそうな人間』として愛羅を選んだのだろう。

「分かりました、何としても禁術を止めましょう。もとより、禁術を放って置くなど出来ません」

「頼むね。俺は手助けは出来るけど、直接干渉が出来ないから、君だけが頼りなんだ。本当なら、俺が何とかしたいところ何だけど」

「分かっています。『神の掟』には、逆らえないのでしょうか？僕が、なんとかします」

真っ直ぐ、意志の強い眼で青年を見つめる愛羅に、青年は懐かしそうに眼を細め、

「…やっぱり、君はあいつの血を引くものだね。その心、その意志の強い眼、変わらないな。さあ、夢が覚める…」

気をつけて…

その声を微かに聞きながら、薄れていく視界に身を委ねた。

第2夜 神の子05

がばっ

勢いよく体を起こし、辺りを見渡す。

頬を冷たい汗が伝う。

部屋は薄暗いが、窓から微かに光が差し込んでいる。

枕元の置き時計を見ると針は五時半を差していた。

「さっきのは夢……じゃないみたいだね」

いつの間に掛けられたのだろうか、愛羅の胸元には先程夢の中であった青年が身に着けていた青い宝玉が埋め込まれた首飾りがキラリとその存在を強調していた。

『忘れるな』という警告なのだろうか。

しかし、彼は『手助けをする』と言っていたはずだ。

とすると、これは『契約』の証なのか。

どっちにしろ、これが存在するということは『あの夢』はただの夢ではないということだけは確信できた。

「随分早いお目覚めだな」

不意に掛けられた声に、視線を首飾りから上にあげると、蒼銀の髪
の青年が金色に輝く瞳で愛羅を見下ろしていた。

「焰……？何で人型に……」

空狐と同じ『焰』と呼ばれた青年は小さく溜息を吐くと、愛羅の横

に腰を下ろした。

「先刻まで古い友人が訪ねてきてたんでな。それより、いつもより随分早いお目覚めだが…何か『視た』のか？」

焰の問いに、ピクツと微かに反応を示す愛羅。

話すかどうか少しの間考えて、結局話す事にした愛羅は口を開いた。

「焰はさ、知ってる？…『冥府の神子』の話」

その言葉に、焰は眼を細める。

「……知ってる。古い付き合いだ」

「じゃあ、旧校舎（いせい）が、昔儀式の場として使われていた事も」

「勿論、知ってる」

焰の言葉に、愛羅は「そう」と一言呟いて口を閉じた。
なんとなく、なんとなくそんな気はしていた。

焰だけでなく、兄も、姉も、式神達でさえ、何か隠しているようだった。

おそらく、彼らが隠していたのはあの場所の『過去』と『彼』の存在だったのだろうと納得した。

彼らのことだ、自分に話さないのは何か理由があるのだとは思っていたが……。

「（まさか、冥府が絡んでいたとは、ね）」

冥府が絡んでいたのなら、おいそれと口に出れる筈がない。

どんなに力を持った術士だろうと、冥府に手を出すなんて死に行くようなものだ。

今回の件も、『冥府の遣い』が出てくる前に片付けたかった、もしくは、『冥府に気付かれなくなかった』のかもしれない。

結局は、『冥府の遣い』と言ってもいい『彼』が愛羅に接触してきてしまったが。

口を閉じたまま、今までの経緯と今後についてぐるぐると考え込んでいる愛羅の頭を、何を思ったのか、焰が優しく撫でた。

「焰？」

「……黙っていたのは、悪かった。まさか、こんなにも早くあいつが『接触』してくるとは思わなかったんだ」

どこか落ち込んだ様子を見せる焰に、愛羅はフツと小さく笑みを浮かべた。

「いいよ、焰が僕に話さないときは、何かしら理由があるときだし……今回の件は、そう簡単に口出来るものじゃないし」

「……そうか。で、あいつとは何を話したんだ」

「ああ、実は……」

焰に先程の夢について話した。

過去視をしたこと。

『彼』に依頼の援護を受けることになったこと。

そして、何故か首に掛けられた首飾りのこと。

「ああ、その首飾りはあいつとお前を繋ぐ一種の『鎖』だな。あいつは…まあ、分かっているとと思うが今回の件について直接手を出せない」

「うん、それは聞いた」

「そこで、だ。お前を媒介にして、力を発揮させようって訳だ。と言っても、あいつ自身が力を使えるわけじゃない。あいつの力を、その首飾りを通して、お前に使わせようって魂胆だな」

「『彼』の力を僕が使えるの？どう考えても無理じゃない？」

愛羅の言葉に、焰は大丈夫だ、と頭を一撫でした。

「あいつの『気』を当てられて立っていたんだろ？なら、充分素質がある。それに、あいつは『お前だからこそ』自分の力を貸すんだろっよ」

「それってどっいっ…」

コンコンッ

愛羅が言い終わる前に、ノック音が部屋に響いた。

「愛羅様、起きていらっしやいますか？」

「起きてるよ」

「御前様がお呼びです。至急鳳凰の間へお越しく下さい」

「分かった、すぐ行く」

女中が部屋から遠ざかったのを確認すると、愛羅は立ち上がった。クローゼットから服を取り出し、着替え始めた。

「焰も来る？」

「ああ、久しぶりに洗ほのかの顔を見に行く」

いつの間に戻った狐姿の焰を、着替え終わった愛羅は抱き上げて、御前様の待つ鳳凰の間へ足を向けた。

第2夜 神の子06

鳳凰の間。

緋守家の一番奥に造られた部屋で、緋守家当主とその直系の数人しか足を踏み入れてはならない特別の間。

その部屋の前に来た愛羅は、無意識に焔を抱く腕の力を強めた。

「愛羅、緊張してるのか」

「するに決まってるでしょ。この部屋、何回来てもなれないし……
じい様は、正直苦手なんだ」

「まあ、洸は喰えない奴だからな。いつも笑みを浮かべてるが、内心何考えてるのか読めない」

「あの人以上に喰えないよ」

焔の言葉に愛羅は同意するように軽く頷き、扉を軽く叩いた。

「…誰かな？」

「愛羅です、じい様が呼んでいるとお聞きしてやって来ました」

「入りなさい」

中から聞こえてきた声に従い中に入ると、愛羅を少し成長させたような姿の人物が椅子に座っていた。

彼が、この緋守家で『御前様』と呼ばれる人物 洸だ。

「見ないうちに大きくなったね、愛羅。さあ、そこに座りなさい」

「じい様こそ、相変わらずのお姿で」

そう言いながらも勧めた席に座る。

焰は、愛羅の膝の上に乗っかり洗を見上げる。

「ふふつ、焰も元気そうだ」

「俺を誰だと思ってる。その辺の奴らと一緒にするな」

ヒュンツと尻尾を振って答える焰に微笑して、愛羅の首元で光る宝玉を見て、眼を細めた。

「成る程、もうあの子と接触したんだね」

「あの子？」

「それは、あの子から貰ったんだろう？力を繋ぐ媒体として、ね」

首元を飾るそれを指差し告げる洗に、愛羅は微かに眼を見開いた。何故、見ただけで分かったのか。

それに、冥府の神子をあの子呼ばわりとは。

「何で分かったか、みたいな顔をしてるね？聞かなかったのかい？あの子に」

「…じい様が、あの方の『気』に倒れなかったと言う話は伺っております。しかし、じい様と付き合いがあるとは思いませんでした」

「ああ…、私から話せ、ということか。あの子らしい考え方だ」

何かを察し納得したように呟く洸に、愛羅も焔も不思議そうに視線を向ける。

愛羅達の視線を受け、洸は微かに苦笑しながら口を開いた。

「愛羅は、私が何故『歳を取らない』と思う？本来なら、私はかなりの歳を取っているはずなのに、私の姿は20代前半と言ったところだろう。不思議に思わなかったかい？」

「…周りの者は、『不老の秘術』だの何だの言っておりますが…私は、禁術による対価か何かかと思えます。じい様が禁術を使った、と言う話は聞いていないので、半信半疑といったところですが」

「ほう…、流石、次期当主候補だね。鋭いなあ」

感心したように言う洸に、焔は眉を寄せた。

「お前、禁術に手を出してたのか」

「…焔には言っただけでなかったね。では、話してあげよう。何故、私がこの様な姿になったかを、ね」

洸はポツリポツリと、昔話を語るように語り始めた。

緋守家、氷季家、地藤家の因縁のこと。

冥府の神子のこと。

氷季家と地藤家が神子を従えようとしたこと。

それを阻止する為、禁術を使ったこと。

「それで…その体ですか」

「そうだよ、最も、この体も冥府の神の慈悲のお陰でこの程度で済んでるんだけどね。」

本来なら、人の姿をしてない化物に堕ちていたはず」

「それが冥府の神の慈悲で『時が流れない体』で踏みとどまったと」

「そうだね、あの方にもあの子にも感謝してるよ。禁術を使ったとき、私は『人として生きること』を諦める覚悟だったからね」

懐かしそうに語る洗に、心中複雑で聞いていた愛羅は、小さく溜息をついた。

この先祖に、この子孫あり…だ。

自分の父親を思い出して、心の中で小さく悪態をつく。

「で、君を呼んだわけなんだけど」

「昔話を聞かせるためだけじゃなかったんですね」

「うん、勿論だよ。君に渡したいものがあってね」

コトンと小さな音を立てて机の上に置かれたのは小さな箱。

何だ、と視線を箱に向けると、洗が小さく笑いながら

「これは、君に譲ろう。君なら使いこなせるはずだよ」

と箱を愛羅の方へ押した。

「これは、何ですか」

「何だと思っ?」

「呪具、の類ですか?それにしては清浄な気を感じますが」

「正解」

洸は楽しそうに笑って告げた。

「これはね、浄魂の笛だよ」

第2夜 神の子07

「浄魂の笛…って、三神器の一つじゃないですか!!」

昔から緋守家・地藤家・氷季家に伝わる三つの神器。

反魂の鏡、破魔の宝刀、そして…浄魂の笛。

その三つは其々の家が管理する門外不出の品。

その一つが目の前にある。

そのことに、無意識に緊張する愛羅に、洸は小さく笑った。

「そつだよ、私があの方から譲り受けた。『己の後継に受け継ぐように』と言う言葉と共にね」

「なら、父さんが受け継ぐべきじゃ…」

「灯火は使いこなせなかったんだよ。相性が悪かったらしくてね」

「相性が？」

愛羅は首を傾げた。

『後継に継ぐように』と言われたらしいのに、相性が関係してくるのか…と。

愛羅の考えが分かったのか、洸は苦笑し、話を続けた。

「浄魂の笛を扱えるのは『和魂』の持ち主だけなんだよ」

「四魂、の考え方ですね」

「そう、私は『和魂』なんだけど、灯火、翠、蒼葉の三人は『荒魂』

らしくてね。この笛を扱えなかった」

「…私は、じい様と同じ『和魂』の持ち主、と言うことですか」

「うん、あの子の『氣』に倒れなかった…そのことが何よりも証拠になる」

開けてみなさい、と言う祖父の言葉に、愛羅は震える手でゆっくりと箱の蓋を開けた。

コトツツと音と共に開いた箱の中に入っていたのは、小さな横笛だった。

瑠璃色をしたそれはどこか神々しく、神器と呼ばれるに相応しい。

「じい様、お言葉ですが…いくらこの神器と相性が良くても、まだ私が『後継者』と決まったわけじゃありません。『後継者候補』ですが」

「灯火は君を後継にするつもりだといっていたから大丈夫だよ」

「（あの狸め……）」

思い通りにことを進めてるであろう父に愛羅は心の中で悪態をつく。

「洸、お前がこれを愛羅に譲ると言うことは…」

「うん、流石焰察しが良いね。今回の件にはこれが必要になると思ってた」

洸の言葉に、愛羅は眉を寄せた。

「この笛が…ですか？」

「うん」

「何故・・・と聞いても答えはくれないのでしょうかね」

「よく分かってるじゃない」

クスクスと笑う祖父に、愛羅は小さく溜息をつく。

この祖父も、あの父も、肝心なことは何一つ教えはしないのだ。

それが、愛羅への試練だと彼自身の分かっているのでそれ以上は聞きはしない。

聞きはしないのだが…、祖父も父もどこか面白がっている節があるのは些か気に入らない。

「まあ、なんとなく察しはついてます。これを出された…と言う点から。まさか、譲られるとは思いませんでしたが」

てつきり貸し出す程度だと思ってました、と告げる愛羅に洗は小さく笑って、箱から笛を取り出すと愛羅へ差し出した。

「これは、もう君のものだ。大事に、使うべき時に使いなさい」

そう言って渡された笛を受け取り、「はい」と小さく頷いた愛羅に、洗は嬉しそうに笑って時計へ視線を映した。

「そろそろ時間だね。もう行きなさい」

「はい、失礼します」

席を立ってお辞儀をし、焰を連れて鳳凰の間を後にした愛羅を見送った後、泷は窓へ視線を向けた。

「きつとあの子が、君を助けてくれるはずだ。だから、君もアレを渡したんだろう？」
皇夜こしや「

泷の小さな呟きは静かな部屋に微かに響いた……。

第2夜 神の子08

鳳凰の間から自室へ戻ると、琥珀と紫苑を喚びだした。フワッと現れた二人は愛羅に視線を向けた。

「愛羅、動くの？」

「うん、そろそろ本格的に動きたい」

「学校へは…行かないのですね」

愛羅の格好を見た琥珀は小さく苦笑した。

普段なら制服を纏っているのだが、今朝は仕事の時の正装を身に纏っている。

「単位の方は大丈夫なんでしょうか…」と心配そうに呟く琥珀に、焰は「大丈夫だ」と声をかけた。

出席日数は少ないだが、成績がずば抜けていいのだ。少々出席日数が足りなくても、そちらの方でカバーできる。しかも家系が家系なだけに、学園の方も了承済みだ。

「…水城に連絡入れなくて平気？」

紫苑の言葉に、ピタッと準備をしていた愛羅の動きが止まる。が、すぐに準備を再開した。

「大丈夫だよ。蓮の事だから、察してフォローしてくれる」

「愛羅は、水城さんにかなりの信頼を寄せてますから」

「ああ、あいつは頼りになるよ。勿論、皆もね」

準備を完璧に終えた愛羅は焰達に視線を向けて、「行くう」と窓の枠に手を掛けた。

もしかしなくても窓から出て行くつもりらしい。

「おい、玄関から行けよ」

「嫌だ、いつあの人に捕まるかわかんないからね」

「あの人…愛羅の父親？」

「成る程、愛羅はお父上が苦手でしたね」

琥珀が苦笑しながらも、窓から出ようとする愛羅を補助する為に、外の窓の下に柔らかい竜巻を造った。

愛羅の自室は三階と意外に高い場所にある。

「だからって、仕事の度に窓から出て行くのはいい加減止めるよ」

若干呆れた様子を見せる焰を、笑顔を浮かべて有無を言わせず肩に乗せ、棧に足掛け窓から飛び降りた。

琥珀の造ってくれた竜巻のおかげで怪我せず下に降りた愛羅の元に、琥珀と紫苑もフワリと降り立った。

「そつえば、紅林は喚ばれないんですか？」

「ああ、紅林は必要なときに喚ぼうと思って。紅林の『気』は強すぎるから」

『魔』の頂点に立つ紅林は、頂点に立つ5人の中でも一際強い『気』を放つ。

その彼女を出したままだと、あの場所に強く影響を与えてしまうと愛羅は危惧した上での判断だった。

「うん、紅林の『気』は強いから色々影響与えそう」

紫苑も愛羅と同じことを思ったのか、頷きながら同意した。

「そうですね、場所と今までの経緯を考えるとそれが最善の判断ですね。それでは行きましょうか」

「うん。琥珀、お願い」

「お任せください」

こくと頷いた琥珀は、ヴォンツと大きな鏡を造り上げた。鏡の中はどこかと繋がってるのか、真っ暗闇で何も見えない。

「ひとまず、旧校舎入り口前へ繋げました」

「上出来、ありがとう琥珀」

「いえ、愛羅のお役に立つことが、私達の喜びですから」

ニコツと笑う琥珀を撫で、ズブズブと鏡の中に入っていく愛羅に、焰達も続いた。

ヴォンツという奇怪な音と共に愛羅が姿を現した場所は、琥珀の言っていた通り旧校舎の入り口前。

早朝だからなのか、それともこの場所が独特だからなのか、辺りは静まり返っている。

「……相変わらず靈気は濃いね」

「けど、靈の気配はしませんね……。靈気そのものが“靈”として存在しているようです」

「琥珀でも靈の気配は感じられない？」

「はい、残念ながら」

琥珀の言葉に愛羅は考え込む。

琥珀は探索のエキスパート。

彼女が『見つけれない』と言うのなら、ここには靈なんてものが存在しないということになるが……。

……ーンッ

「……今、聞こえた？」

「うん」

「はっきりと。どっちら鈴の音のようですね」

「鈴？今回の依頼で被害者が聞いたのは『旋律』だろ？鈴の音なんて報告はないはずだ」

焰の言葉に愛羅も頷く。

今回の元々の依頼は『謎の旋律』が主な内容だった。

色々ありすぎて自体は大きくなっているが、元の依頼は『旋律について』だった。

その中で『鈴の音』なんて言葉はなかったはず。

…リーンッ

「だんだん、音が大きくなってる」

…リリーンッ

「と言うか、近づいてきてる…?」

…チリリーンッ

はっきりと、鈴の音が聞こえた瞬間

グニャアツッと周りの景色が歪み出した。

「どうなってる?!」

「わからないっ。紫苑ッ、琥珀ッ?!」

「私にも分かりませんっ」

「……異空間に繋がる」

「紫苑?!それはどういっ」

紫苑に問いかける途中で、愛羅は意識を手放した。

第2夜 神の子09

「……ん」

ゆっくりと目覚めた愛羅の瞳に映ったのは、見慣れた旧校舎ではなく大きな鳥居と社だった。

辺りを見渡すと、焰も琥珀も紫苑もない。

普段なら離れていても感じる気配さえ感じられない。

一体ここは何処だ？と辺りを睨みつける。

意識を失う前、紫苑が言った言葉を思い出す。

『異空間に繋がる』

その一言が、愛羅の頭の中を過ぎる。

「紫苑は確かに『異空間』に繋がるって言った。ってことは、ここはあの場所と似ていて異なる場所…？」

「正解」

突然聞こえた声に、ぱつと振り返る。

そこにいたのは、『冥府の神子』だった。

ただ、あの時とは違い、服装は中華風で鎖が絡められている。

「冥府の神子…様」

「皇夜」

「……は？」

「俺の名前。『冥府の神子』とか仰々しく呼ばれるのは嫌いだから名前と呼んで」

「しかし、『真名』は……!！」

「大丈夫。『皇夜』って言うのは君達で言う『愛称』だ。『真名』じゃない」

『真名』を知られるのは危険な事。

『真名』を敵に握られると言うのは自分の命を握られたも同然。それを、こう簡単に人に教えるなんていいはずがない。

ましてや『冥府の神子』と呼ばれる彼の名は、それこそ軽々しく口にしてはいけないはず。

そう危惧している愛羅に、皇夜はケラケラと笑ってそう告げた。確かに、彼は元人間だとしても現在は神の眷族に当たる。

おいそれと『真名』を名乗るはずがない。そう己を納得させた。

「……では、皇夜様」

「『様』もいらないし、敬語も要らない。君とは普通に話したい」

「……あなたは、『神の眷属』と言う立場を分かってますか？」

「分かってるよ。けど、『偉い』のは父さんで俺じゃない。それに俺は元人間だ。愛羅達とは普通に『皇夜』として話したい」

「…わかった」

全く譲る気のない皇夜に愛羅は小さく溜息を吐いて了承するように頷いた。

こうでもしないと話が進まないと思ったのもあるが、話している間皇夜が見せた寂しそうな表情が愛羅を頷かせた。

「で、最初に戻るけど、ここは君達の言う『異空間』。俺の住処だよ」

「ここが…皇夜の…」

「そつ、ここは云わば生と死を分かち場所。向こうに見える川を渡れば冥府だから渡らないように」

そう言つて指差された奥の方には確かに幅の広い川が流れていた。

川の向こう側に微かに見える地、あそこが冥府の玄関口。ぼう…と川を眺めていると、皇夜が愛羅の名を呼んだ。

「はい？」

「とりあえず、社の中においで。君の使い魔もパートナーも中で休んでる。君も社の中へ呼んだつもりだったんだけど…どうやら、君の妖力は俺の力より強いらしい。本能的に俺の力をはじき返したみたいだね」

くすつと笑って社へ導く皇夜の後を、愛羅は大人しくついていく。

*

社に着くと、皇夜の言った通り三人がそこにいた。心配してくれていたらしく、愛羅が姿を見せた途端三人に飛びつかれた。

その様子を皇夜はケラケラ笑いながら眺めていた。

一通り抱擁を済ませたのか、四対の瞳が皇夜へ向けられた。

「私達を呼んだのはあなたでしたか、皇夜様」

「うん、ちょっと強引だったけどね。まあ、事態が事態だから」

「それにしても、もう少しやり方があった」

「君がいたからこのやり方にしたんだよ、虚空の君。それに万が一の事があってもここは俺のテリトリー内だし、幽華の君がいるのも確認できたから」

琥珀や紫苑と話す皇夜に、愛羅は眼を瞬かせた。

「琥珀、紫苑…皇夜と面識あったの？」

愛羅の問いに、二人ともこくと首を縦に振った。

「我々と冥府の方々は意外と接点が多いんですよ、愛羅」

「特に、琥珀と私は冥府の特質を持ち合わせてる。彼らと面識があるの、おかしくない」

「そうなんだ…知らなかった」

少なからずショックを受けている愛羅の頭を皇夜はヨシヨシと撫でた。

「知らなくても仕方ないよ。そんな話、知ってる方が特殊だ」

慰めてくれる皇夜に、愛羅は小さく「ありがとう」と笑った。

「で、俺達をわざわざ呼んだ理由は何だ」

焰の言葉に、皇夜はスツと愛羅から離れ奥へ続く廊下へ出た。

「君達に見せたい物がある。ついておいで」

そう言って奥へ向かう皇夜の後を、不思議そうに首を傾げながらもついて行った。

第2夜 神の子10

皇夜が愛羅たちを案内したのは、社の奥の部屋だった。

先程までの雰囲気微妙に変わり、ひやりと冷たい空気が頬を撫ぜる。

微かに変わった空気に、愛羅は眉を寄せた。

「…空気が、変わった」

「流石、次期当主だね。ほんの少し空気が変わったただけなのに、気付くなんて」

皇夜はくすつと笑って、札が無数に貼られた襖の前に立ち、愛羅達に視線を向けた。

「ここ、だよ。正確には、この中…だけどね」

「……この札、魔封じの呪が掛けられてる」

「…それに、押さえ込んでいますがかなり大きな負の力が感じられます」

「…どういうことだ、皇夜」

紫苑と琥珀の言葉に、焰は皇夜を睨んだ。

しかし、皇夜は焰の睨みも物ともせず片手を襖に添えた。

「警戒しなくてもいい。彼女は害のある者じゃないよ…少なくとも今はね」

「今は…ってどういこと？」

「その話は中に入ってから話す。少し下がってて」

皇夜はそう告げ、襖に手を掛けた。

ズ…ズズ…ズ…と襖は音を立てゆっくりと開いていく。
中は薄暗く、意外と広い。

パチンツと電気をつけると、部屋の奥まで見渡せる。

「！！」

部屋の奥のある一角を見て、愛羅たちは動きを止めた。

そこにいたのは、体を鎖で縛られ、体中札を貼られて氷に閉じ込められている少女。

幼い顔立ちから、14、5と言ったところだろうか。

「俺が君達に見せたかったのは、彼女だ」

「彼女は…一体…」

「あの札、襖に貼られていたのと一緒に」

「負の力も、彼女から発せられています」

琥珀と紫苑は氷付けの少女の周りを飛び回りながら告げる。

「あの女…妖か？」

「違うよ、焰。彼女は、人間だ」

今は、まだね…と複雑そうな表情で告げる皇夜に、愛羅は眼を細め少女に視線を移した。

彼女の表情は酷く穏やかだ。

琥珀は「負の力」を感じると言っていたが、負の力を持った人がこんな穏やかな表情を浮かべるかと訊かれたら、答えは否だ。

負の力は表情も曇らせる。

こんな穏やかな表情を浮かべる彼女に負の力が宿ってるとは信じがたい。

「……彼女は…今回の事件に何らかの関わりがあるの?」

「さあ?そこまでは俺も知らない。ただ、あそこに亜空間が出来始めてから彼女に施された術が綻び始めた。関係してない、とは言いきれないだろう?」

「確かに…関係はありそうだな」

「術が解ければ、彼女は目覚める。そうになると、厄介な事になりかねない」

「…そもそも、何で封魔の術を施してるんだ?あの女が『人間』なら術を施す必要はないだろ」

「すまない、それについては今は何とも言えない」

皇夜は首を横に振ってそう告げた。

どうやら訳有りのようで、焰もそれ以上追求できなかった。

「……あの亜空間が、この部屋と繋がると言う可能性は？」

「0とは言い切れないな。繋がることはないだろうが、飲み込まれる可能性はある。この世界も現世に近い位置に存在してるから」

「紫苑、ここから旧校舎に飛ばせる？」

クルリと振り返り紫苑に問うと、紫苑はコクリと頷いた。

「じゃあ、僕達を旧校舎まで飛ばしてくれろ？」

「了解」

「あー…俺が送ろうと思ったんだけど」

「ありがとう、皇夜。けど、皇夜はこの事件が解決するまで姿を見せない方がいいと思う。何か、嫌な予感するから」

愛羅の言葉に皇夜は考える素振りを見せると、小さく頷いた。

「まあ、愛羅の言う事も一理あるか。じゃあ、気をつけて」

「うん。紫苑、お願い」

琥珀と焰を抱き上げ、紫苑に指示を出す。

紫苑はヴォンツと身丈ほどもある杖を取り出し、トンツと床を叩いた。

その瞬間、ヒュンツと愛羅達の姿は消えた。

第3夜 旋律01

紫苑の力で旧校舎に戻ってきた愛羅達は、旧校舎を見上げた。どこか不気味な雰囲気は纏ったまま。おそらく、これは今回の件の所為だろう。

「愛羅、これからどうするの?」

「……まず『旋律』の正体から突き止めないと、ね」

「最初の依頼はそれだったしな」

焰の言葉に頷いて、旧校舎に入っていく。

中はひんやりとされていて、相変わらず靈気が濃い。しかし、以前のように亜空間に繋がる様子は見られない。

「…前は、亜空間に入り込めたんだけど」

「…今回は無理そうだな」

ヒュンツと尻尾を振って焰は周りを見渡す。

以前は、月花の導きで入り込んだ様なものだ。

そもそも、亜空間はそう簡単に入りこめるはずがない。

あの時は運が良かったか、月花のおかげと言えるだろう。

「前は、月花によって入り込んだんですよね?」

「うん…と言ってもあの時の目的は『亜空間』じゃなくて『カガミ』だったんだけど」

「月花は、魔と闇を纏う者。私と紅林の属性を半々持つから、亜空間への道は無意識に作り上げた」

「ああ…たしか『亜空間』は『無』の属性を持つお前の支配下か」

「そう、私達『無』は亜空間の出入り自由。『無』だからこそ、そこへ導く橋となる。愛羅、亜空間に行く？」

紫苑の申し出に、愛羅は首を横に振った。

「紫苑、気持ちは嬉しいけど、今回は亜空間に行く必要はない」

「『旋律』の元凶はここにいて言うのか？」

「そういうこと」

「まあ、人が『聴いた』と言うなら亜空間ではないでしょうね。普通の人が亜空間に入り込むなんてまず不可能ですから」

「仮に『亜空間』の何かがその人達を呼び寄せたとしても、その人達死んでる。普通の人にとって亜空間の空気は毒だから」

「うん、でも今回は誰一人死んではいない。だから、亜空間じゃない。つまり、この旧校舎の何処か」

「で、見当はついてるのか？」

「うん、音楽室」

パリン、パリン、とガラスを踏みながら目指していたのは音楽室。
『旋律』と言うからには『楽器』が必要だろうと、愛羅は考えた。
それならば『楽器』が置いてある音楽室に元凶はいるんじゃないか、
と。

「音楽室…ここか」

一つの教室の前に立ち、プレートを見て呟く。
プレートには確かに『音楽室』と掠れた文字で書いてあった。

「入るよ」

「おう」

ドアに手を掛け、ガラガラ…と扉を開いた。

*

「律っ、早くそいつを消せ!!」

「無理言っとなっ!!こいつ、めちゃくちゃ強いんだぞ?!」

扉を開いた愛羅達の瞳に映ったのは、怨霊と思わしき影に襲われて
いる従兄弟とその式。

従兄弟の式では手も足も出ない様子。

「……えーと、相変わらずな方ですね」

「…………馬鹿」

「同感だ」

「…………力だけじゃ、上手くないっていつも言ってるのに。…紫苑、お願い」

「…愛羅が言うなら」

紫苑はフワツと、紅弥達の前に立ち、怨霊に手を翳した。すると、怨霊はたちどころに大人しくなり、フツと消えた。暫くして、放心状態から立ち直ったのか、紅弥は愛羅の元へ戻る紫苑に視線を向けた後、愛羅に視線を移した。

「愛羅……………!!」

「…相変わらず強引なやり方だね、紅弥」

愛羅がそう告げると、紅弥は罰の悪そうな顔を見ると愛羅に近寄った。

第3夜 旋律02

「ふん、遅かったな」

「色々あったんだよ。それにしても相変わらず力任せなそのやり方、いい加減止めたら？式、かなり消耗してるみたいだよ」

視線を紅弥の傍に控えている律に移しながら呆れたように告げられた言葉に、キツと愛羅を睨みつける。

言い返したいが、愛羅の言ってることが正しいと分かっているのか、悔しそうにギリツ…と唇を噛み締める紅弥に、彼の式である律は慰めるように頭を撫でた。

「律も、いくら紅弥が好きだからって甘やかしてたら駄目じゃないか。いくら君が強かろうと、今回みたいな事になりかねないよ」

「うー…分かってんだけどな」

「分かっている、じゃありませんよ。下手したら、死んでいたかもしれないんですよ？そもそも、あなたは獣属性。対する相手は魔属性。敵う相手じゃないのは目に見えてるでしょう」

「…厳しいなあ、幽華の君は」

「琥珀が厳しいんじゃない。あなたが甘い、ただそれだけ。自分の力が全く効かない相手と対峙するのは自殺行為。あなた、死ぬ気？」

苦笑を浮かべる律に、琥珀と紫苑が口々に言う。

二人の言い分は最もなこと。

律は、反論も出来ずに苦笑を浮かべるだけ。

「それにしても…さっきの奴、霊の気配はしなかったな…。その代わり…魔の気配が微かに漂ってる。琥珀、よく相手が魔だってすぐ分かったな」

「私は、気配には敏感ですから。気配にはそれぞれの属性事に特徴があるんです。それを感じ取ったので。愛羅も、よく分かりましたね…ほんの微かしか魔の気配はしないのに」

「ああ…慣れ、だよ」

「ふ、ふんつ。それくらい、俺だって分かってたさ」

「それなのに、律を喚んだの？」

「ぐっ…」

「獣は魔に弱い…基礎中の基礎でしょ。あのまま紫苑が助けなかったら…君達2人も死んでたよ？」

小さく溜息を吐く愛羅に、紅弥は何も言い返せない。

場の空気を読み間違えたのも、召喚ミスしたのも、全て自分の間違った判断。

それを痛感させられて、ギュウツと手を握り締めた。

「…『魔』属性なら、紅林を喚ぶか」

5色の宝玉が埋め込まれた首飾りを服の中から取り出し、前に掲げる。

「全てを紅く染める魔の王よ、契約に従い我の前に姿を示せ」

パアッと赤い宝玉が光りだすと、フワンッと紅林が姿を見せた。

「愛羅、やっと喚んでくれたのねっ!!」

嬉しそうに笑う紅林の頭を、愛羅は優しく撫でた。

「この部屋に残ってる微かな魔の気配を追って欲しいんだけど」

「あら？今回の『お転婆さん』は私の配下なの？」

「そうみたいです。霊の気配はしませんが、魔の気配は微かに感じることが出来ます」

「琥珀がそう言うならそうね。紫苑もそう思うんでしょう？」

紅林の問いに、紫苑はこくと頷いた。

「先程、一匹消した。……魔の属性だった。今回の件に『魔』が関わってるのは確実」

「あら、それなら本当に湊の出番無いわね。湊は私達『魔』にはてんで弱いんだから」

クスクスと笑う紅林に反応するように、蒼の宝玉が点滅する。おそらく、紅林の言葉に反論してるのだろうが、当の本人は気付かない振りをしている。

「紅林」

「分かってるわよお。愛羅はせつかちね」

「紅林、今回の件は『あの方』も関わってるんだ」

「あの方って…まさか」

紅林の視線を受けて、琥珀は苦笑し紫苑は微かに眉を寄せる。
二人の様子に何か悟ったのか、紅林は嫌そうに顔を歪めた。

「それなら、さっさと済ませた方が得策ね。……気配はあっちに続
いてるようよ」

紅林の指が指し示すのは音楽準備室。

「確かあそこには…壊れたピアノが置いてあったような…」

「ああ、3ヶ月前に壊れたピアノが運ばれてたな」

「…紅弥、ついてくる気？」

「俺も、この依頼を受けてるって忘れてないか？」

「忘れては無いけど…」

「……ふん、心配しなくても今回の勝負は無しだ。…さっき不本意
だが助けられた義理もあるからな」

フンツとそっぽを向く紅弥に、小さく溜息をつきながら、準備室の

扉のドアノブに手をかけた。

第3夜 旋律03

ギィィィィ．．．と重そうな音を立てながら開く扉の向こうは真っ暗で、何も見えない。

明かりをつけようと、スイッチを手探りで探す。

パチンツとスイッチを押すと、パツと明かりのついた。

部屋の中では、部屋の中央に大きなグランドピアノが我がもの顔でそこに存在していた。

普通の人は見えないだろうが、ピアノの周りには薄っすらと影が纏わりついていて、禍々しい雰囲気醸し出していた。

揺ら揺ら揺れるソレは、意思を持っているように蠢いていた。

「あら…かなり濃い『魔』の気配だと思ったのに…紛い物だったの」

「紛い物…でしたか。どうりで、強いわりに不安定な気配のはずです」

「どづいつこと?」

紅林と琥珀の言葉に、愛羅は眉を顰める。

視線は勿論、ピアノに向けたまま。

影はこちらの様子を窺うようにただ揺れるだけだ。

「アレは純粹な『力』…『存在』じゃない。本物そっくりの『紛い物』…人工物」

「人工物?アレが?」

あんなに強い気配を放つものが人工物なのか。

愛羅は信じられなかったが、彼女達が言うのなら間違いはないだろう。

そうなれば問題はただ一つ。

『アレ』は誰が造ったのか、ってこと。

普通の人は勿論、力が弱い術士でもまず無理だろう。

本物と見間違うほどの精密で巧妙な物。

呪物…と言っても良い物かも知れない。

アレは、簡単に造れるものではない。

「どんなに強い気配でも、人工物ならそんなに手間は掛からないわね。直ぐに消すまでよ」

紅林が片手に力を圧縮し、それをピアノに向かって放つ。

しかしバチバチツと音をたて、紅林の放った力はいとも簡単に跳ね返されてしまった。

「なっ！！」

力を跳ね返されたことに、全員が眼を見開く。

「おい、簡単じゃなかったのか?!」

「煩いわね、餓鬼んちよ!!こんなこと予想外よ!!普通の紛い物なら私の力で十分消せるもの!!」

紅弥を紅林がキツと睨みつける。

「紅林の言う通りです。『紛い物』は所詮造られた物。『紛い物』が本物の力に勝てるはずがありません。これは、何かおかしいです!!!」

「じゃあ、一体何だっけ言うんだよ?!」

紅弥が苛立った様に叫んだ直後、ビュンツと影の一つが紅弥に向かって振りかぶってきた。

「危ない!!」

それに気付いた愛羅が擦れ擦れで庇ったおかげで、影は紅弥ではなく壁にドコツとめり込んだ。

「いたたっ…。紅弥は無事？」

「……助かった。…礼は言っとく」

愛羅が庇ったおかげで、紅弥は傷一つ負っていない。紅弥は俯いたまま、それでも礼を告げた。

「怪我が無いなら良いよ」

「愛羅!!大丈夫？」

焦った様子の紅林が愛羅の元へ飛んで来た。

「心配ない、怪我してないよ。それより、どうやら一筋縄じゃないかな」

「……ただの人工物とは、わけが違うみたい。」

「だろうね。紅林の力を弾くほどだ。対策を考えないと」

「迂闊に手を出したら、逆にこちらが不利になってしまいますからね…」

「ほんと、『紛い物』だと思って油断しちゃったわ」

「とりあえず、紅林の力が跳ね返されたってことは直接攻撃出来ないってことかな」

「おそらく。私でも、紫苑でも跳ね返されてしまうでしょうね」

ピアノを睨みつけながら、攻略を練る。

その間も、ピアノの影はうようよと動いてこちらを攻撃してこようとす。

それを琥珀に張らせた結界でしのいでいると、ソレは聞こえてきた。

ポロンポロンツとピアノの音が、静かに旋律を紡ぎ始めた。

これが、依頼にあった旋律。

悲しいような、寂しいような…儂げな旋律が…。

静かな部屋を、旋律が支配し始めた。

第3夜 旋律04

ポロン、ポロロン・・・と音が鳴り出したと同時に、ピアノの鍵盤付近にボウツと人影が浮かんで来た。

黒い影が纏わりついているソレは、どうやら少女のようだ。

少女は愛羅たちを見向きもせず、ひたすら旋律をその手で奏でるだけ。

その旋律に合わせて影が愛羅たちを襲う。

琥珀の結界によって愛羅達に危害を加える事はないが、影は何度も結界にぶつかり、ベチャリベチャリと嫌な音を立てる。

それでも、ピアノの前の少女は視線を向けることはなく、ただ旋律を奏でるだけ。

「あの子が元凶か……」

「そうみたいですな」

「あの子は本物ね、しかも怨霊レベルの子。浄霊は出来ないかも知れないわね」

紅林達の言葉に、愛羅は悲しげに少女を見やる。

『浄霊』が出来ないとすれば必然的に『除霊』をすることになる。

霊たちを強制的に排除するやり方は、なるべくしたくない愛羅は、どうにか説得できないかと辺りを見渡す。

ふと、彼女の傍で微かに光る陣を見つけた。

「ねえ、焔。あれ……」

「ん？…アレは…そうか、こいつは無理やり怨霊になったものか」

「確か、兄さんに貸してもらった本に書いてあったよね？」

「ああ、あの陣はあの霊を無理に怨霊化させるための物と見て間違いないだろうな」

「無理に怨霊かされたものなら…浄化可能」

「本当?!紫苑!?!」

紫苑はこくんつと頷いて、陣に指を差す。

「あの陣が、あの霊に強制的に負の感情を送り込んで。故意に怨霊にする場合、負の感情を持続的に送り込まないといけない。だから、あの陣はあの霊が怨霊でいるためには必要不可欠」

「と言うことは…あの陣をどうにかすれば何とかなるって事だな」

紅弥がそう言って、律を陣の場所に向かわせようと指示を出そうとすると、紅林が何処から取り出したか分からないハリセンで、紅弥の頭をスパーンツと叩いた。

「何すんだよ、赤女!?!」

「この餓鬼んちよ!?!律じゃ無理だってどうして学習しないの!?!」

「はあ?」

「あの陣も『魔』の力で構成されてるんですよ。ですから、律では

解く事はおるか、返り討ちに遭いますよ？」

比較的温厚な琥珀にまで呆れたように言われ、紅弥は悔しそうに顔を歪めた。

「紅弥、正直…今回俺だけじゃ、きつい。あいつ喚んだ方がいい」

「けど、あいつは俺の言う事を素直に聞かないんだぞ?!」

「あいつ…って?」

『あいつ』が誰だか分からない愛羅は、不思議そうに首を傾げる。

「あいつって言うのは…俺と同じ紅弥の式なんだけど…まあ、何て言うか素直じゃないんだよ」

苦笑を浮かべながら告げる律に紅弥は更に嫌そうな顔をした。

「ふうん、でも相性はいいんでしょう?式として紅弥と契約してるなら」

「ああ、相性はいいんだ。けど、ほら、どっちも素直じゃないから」

「ふうん。まあ、他に式がいるなら喚んだ方がよいよ。今回律は分が悪い」

愛羅の言葉に、紅弥は「分かってる」と小さく言い、溜息を吐きながら一枚の札を出す。

「炎を纏いし蜥蜴よ、契約に従い、我の前に姿を示せ」

ポオツと札が燃えたかと思うと、そこからオレンジ髪の少年が出てきた。

「フンツ、久々の呼び出しか」

「正直、喚びたくはなかったがな」

「律だけじゃ、手が余るのか。未熟者だな」

紅眼の瞳がキラリと光り周りを見渡す。

紅林の姿をその瞳が捉えたかと思うと、少年は紅林の前まで来て跪いた。

「御目に掛かれて光栄です、妖艶の君」

「あら、誰が喚ばれるのかと思えば、『サラムンダー』あなただったの。プライドが高いと有名だったけど…あの餓鬼んちよと契約結んだのね」

「ええ…まあ、ちよつとありまして」

「ふん。素直に『勝負して負けました』ぐらい言えよ、炎珠」

「煩いぞ」

ポオツと炎珠と呼ばれた少年から放たれた炎は紅弥を襲う。が、紅弥は軽くそれを避ける。

「避けんな」

「なら、当ててみるよ」

バチバチツと睨み合う二人に、愛羅達は深く深く溜息を吐いた。

第3夜 旋律05

「……喧嘩するのは良いんだけどさ、状況と場所を考えて欲しいよね」

「本当よね。私達が無事なのは琥珀が頑張ってくれてるからなのに」

「私のことは気にしないでください。この程度、なんともありませんから」

深く溜息を吐きながら、紅弥と炎珠のやり取りに呆れたような眼差しを向ける愛羅と紅林。

結界を張り続けているのにも関わらず、余裕そうに答える琥珀。

そんな彼らに苦笑しながらも、自分の主と仲間をフオー出来ないでいる律。

そんな中、紫苑はス……と瞳を細め、手を紅弥と炎珠に向ける。

キンツと空気が一瞬止まったかと思うと、紅弥と炎珠は動きを止めていた。

「ようやくじゃれ合い終わった？」

「じゃれ合い言うな!!体が動かねんだよ!!」

「はあ？」

「…紅弥と同意見なのは癩に触るが、俺の方も動けん」

本当に体が動かないのか、視線だけ愛羅達に向けて叫ぶ紅弥と、体が動かないと言うのに冷静な炎珠。皆の視線は、二人に手を向けている紫苑に注がれた。

「紫苑：？何かしたの？」

「煩いから、彼らの体を支配した。彼らの体は、今、私の支配下」
どうやら彼らのジャレ合いが紫苑にとっては相当煩かったらしく、一時的に彼らの体を支配したらしい。眉間に皺を寄せながらも、もう喧嘩しそうにない二人に手を下ろした。

すると、彼らに掛けられていた術が解けたのか、紅弥と炎珠は手を握ったり開いたりして確認していた。

「紫苑の十八番よね、他人を支配するの。流石、『闇』と『無』の女帝と言われるだけあるわ」

「…紅林だつて、意識を支配するの得意。私と然程変わりはない」

「あら、私は意識を『支配』してるんじゃないわ、『魅了』してるだけ。だから、それなりに精神力が強い人は掛かりにくい。だけど、紫苑の『ソレ』は違う。紫苑の場合は、主を除いて『全ての物』を支配できる。紫苑が支配を断ち切らない限り、半永久的な支配が出来る。そんなこと、紫苑以外に出来ないわ。琥珀もそう思うでしょ？」

「そうですね。紅林の『魅了』と違い、紫苑の支配は私達にも効きますから」

琥珀も紅林の意見と同じだ、と首を縦に振る。

当の本人は、そんなことない、と言いたげに二人に視線を向けた。

「その話は、今はどうでも良いだろ。今はアレを何とかするのが先決だ」

終わりそうにない話に、焰はヒュンツと尻尾を振りながら、ピアノの方に向ける。

やはり少女はただピアノを弾いているだけ。

しかし、その旋律には魔力が混ざっていて、普通の人には害のあるものだろう。

「ふん：今回の標的はあいつか。確かに、律じゃあ無理だな。俺に勝てん奴が、これに勝てるとは思えん」

「炎珠、もうちっと柔らかく言ってくれ。俺だって傷つくときは傷つくんだぞ？」

「傷ついとけ。どうせ紅弥に甘いお前の事だ。俺が呼ばれたのも、相性最悪なのに紅弥の為とかで対峙してやられそうになったのかなだろう」

「よくお分かりで。流石だな、炎珠」

「お前と何年組んでると思ってるんだ。いい加減、その甘さを何とかしろ。お前が傷つくと俺が困る」

「……おう、今度は気いつける」

「そうしろ」

二人で盛り上がってる紅弥の式達に、愛羅達は意外だと言いたげな視線で彼らを見つめた。

「あの二人、属性で言えば相性最悪なのに…」

「チームワークは良好ねえ。あのプライドが高い『サラマンダー』がああも言うなんて…仲良きことは美しきかな、ってね」

「炎珠…主のあの子の前と律の前じゃ、違う」

「本当ですなえ」

「……炎珠は、ああ見えても仲間思いなんだ。俺の言うことは素直に聞かないくせにな」

紅弥は溜息を吐きながら言った。

「紅弥も素直じゃないからね。どっちもが維持張ってたら上手くないに決まってるじゃん」

愛羅は呆れたように告げると、紅林に視線を向けた。

「紅林、あの陣は炎珠だけでも壊せそうかな？」

「…サラマンダー程の力なら、壊せると思うわ。アレが、普通に施された物ならね」

先程の事もあってか、紅林は考え込むような仕草を見せた後そう告げた。

愛羅自身、先程の例を考えるとあの陣が普通の物かどうか判断しかねる状態だった。

「当たって砕けるしかないだろ。炎珠、あの陣を壊せ。早急にな」

「ふん、いちいち偉そうに命令をするな、未熟者」

そう口答えする炎珠だが、陣に向かって炎を放つ。

別に、紅弥を認めていないとか紅弥が嫌いなわけではないから口答えしても、最終的に命令はちゃんと聞く。

二人のやり取りを見て「本当に素直じゃない奴らだな…」と律が笑っていたのを二人は知らない。

第3夜 旋律06

ポオオオオ．．． と炎珠の放つ炎が陣を飲み込む。

その様子は凄まじく、肌を撫でる熱風がその威力を物語る。

「やったかつ…?!」

期待したような眼でその様子を見る紅弥だが、炎を放ってる炎珠の顔は厳しいものになり、額には薄っすら汗が浮かんでいた。

シユウウウウ．．． と激しく渦巻いて陣を飲み込んでいた炎が、突然消えた。

陣は傷一つなく、未だその姿を保っていた。

皆の視線が炎珠に向けられる。

先程の炎にかなりの魔力を注ぎ込んだのか、炎珠はぐったりと壁に より掛かっていた。

顔色も少し悪く、苦しそうに顔を歪めていた。

「炎珠っ!!」

心配そうに炎珠の傍にいく律に、炎珠は片手をあげて制した。

「だ…大丈夫だ。少し、魔力を使いすぎた」

「魔力を使いすぎて大丈夫なわけあるか。ほら、寄りかかれ」

律の言葉に反論する気力もないのか、炎珠は素直に律の方に寄りかかった。

その様子に、皆、苦虫を噛み潰したように顔を歪めた。

「紅林、サラマンダーの魔力はどれくらい？」

「…私達を100とするなら、彼の魔力はざっと85くらい…貴族級の魔力よ。大抵の事は出来るくらいかしら」

「…琥珀、陣の方は？」

「…全く傷ついていません。先程の魔力を受けていたら少しは崩れると思いましたが…ビクともしていませんね」

紅林と琥珀の言葉に、愛羅は頭を悩ませる。

上級の魔力でも、あの陣は壊せない。

『普通』なら、紅弥の式である炎珠でも壊せるものらしいが、あの陣は壊せなかった。

つまり『普通じゃない』ということ。

「おい、様子が変だぞ」

焰の言葉に、全員の視線がピアノに向けられた。

先程まで、ピアノを一心に弾いていた少女が、こちらに視線を向けていた。

その瞳は虚ろで彼女の意思が感じられない。

それどころか、ピアノに纏わりついていた影が、彼女にも纏わりつき始めた。

「さつきまで、こっちの事気にも止めてなかったよね？それに、影が…」

「おそらく、あの陣に手を出したからだろ。影はあの霊を支えている

ようだな。まあ、今の姿を保ってるのは陣だからな。陣にしかけたのは少しは効果があったということか」

「と言うことは、僕達は彼女の標的になったって事？」

「そういうことだ。気を抜くなよ、愛羅」

焰は威嚇するように、少女を睨みつける。

焰の体からは金色を帯びた炎が纏わりつく。

『 て』

少女の口が、動く。

『 し…い…』

「あの霊、何か言いたいみたい」

そう言うと、紫苑は少女の例の前まで移動した。

『闇』と『無』の力を併せ持つ彼女は、操られた霊との交信が得意だ。

そのことを知っている愛羅は、黙って事の成り行きを見守ることにした。

「あなたは、何を伝えたいの？私が届ける、話して」

紫苑の紫の瞳がキラリと光る。

それに合わせて、少女の瞳に微かに光りが灯る。

『 て、く…しい…けて』

だんだんと少女の言葉が紡がれていく。

『…苦、しい…助けてっ！！！！』

ブワッ

「！！！」

「紫苑っっ！！！」

少女が叫んだと同時に紫苑は吹き飛ばされた。

おそらく、彼女に纏わりついている影の力だろう。

吹き飛ばされた紫苑を何とか抱き留めた愛羅は、視線を少女に向ける。

『助けて…邪魔をするな…苦しい…手を出すな』

反対の言葉を交互に吐き出す少女。

己の意識を取り戻しつつある少女に、愛羅の瞳に希望が宿る。

「焰、あの子が意識を完全に取り戻したら、陣の威力も弱くなるかな？」

「…そうだな、あの霊の意識を取り戻せば、負の力の供給も難しくなる。必然的に、陣の力が弱くなるだろうな」

焰も、愛羅の言いたいことを理解し、再び少女に視線を向ける。

支配と自分の意思の覚醒で苦痛の表所を浮かべる少女。

ここから、彼らの反撃が始まる。

第3夜 旋律07

「意識を取り戻すって、どうする気だ？」

紅弥は霊を睨みつけながら問う。

その手には数枚の札が握られている。

その札はどれも徐霊の為の呪が書かれている。

「今の彼女には僕達の声は届かない。だけど、彼女を取り巻く影をどうにかして散らせばあるいは」

「“消滅”じゃなくて散らすだけか？」

「うん、あの影は陣と彼女を繋いでるものだ。だから、陣をどうにかしないと完全に“消滅”させることは出来ない。勿論、彼女にも手は出せないから、その札は仕舞ってよ」

「ちっ」

ちらりと紅弥の手元を見て告げれば、紅弥は小さく舌打ちして札を仕舞う。

「で、作戦は考えたのか？」

「うん。琥珀、紅林、君達二人で影を散らしてほしい」

「はい」

「任せなさい」

「紫苑は僕とあの子を繋ぐ役目を」

「勿論」

愛羅の腕の中で紫苑は頷くと、スツと腕の中から抜け出して、霊と向き合った。

「おい、俺はどうすれば良い？」

「…そうだね、炎珠は今休ませなきゃならないから…律に結界を張らせて。獣属性だけど結界が張れるんでしょ？」

「ああ。律、結界を張れ」

「了解。けど、向こうが“魔”なら…そんなに長くは持たないぞ？」

「構わない、俺も張るからな。二重結界だ」

紅弥は数珠を取り出して不敵に笑う。

律も、そんな彼を見てニヤリと笑い結界を張った。

「だが…アレの自我を取り戻すのは難しそうだな」

焔がヒュンツと尻尾を揺らして影を散らしている2人を見つめながら呟いた。

「それでも、やらなくちゃならない。そうでしょ？」

「…っふ、そうだな」

硬い意思が籠った愛羅の言葉に、焰の口が緩む。

「愛羅っ、今がチャンスよ!!」

紅林の声に、愛羅は紫苑に視線を向ける。
紫苑は軽く頷き、片手を霊の方へ向ける。

「我は闇、我は無、我は汝らの影、汝の声を我に届けよ、我らの声を聞き届けよ」

紫苑が淡い光に包まれる。

「…愛羅、彼女の心と繋がった」

紫苑の言葉にこくと頷き、片手を紫苑のそれと重ね、呪を紡ぐ。

「闇に捕らわれし心よ、我の声に耳を傾けよ、汝に纏わりつく影を払え」

パァッ と愛羅の手が光ったかと思うと、霊の瞳に微かだが光が戻りだした。

彼女の動きも止まった。

「愛羅っ、彼女の意識が微かですが戻ってきています!!」

影を散らしていた琥珀が、嬉しそうに愛羅に報告する。
それに愛羅は頷き、更に呪を重ねる。

「影を払う光は我が造ろう、闇を払え、影を打ち消せ、汝の心をここに現せ！！！」

パンツ と弾ける音と眩しい光。

「きゃあっ！！」

「うわっ」

「な、何だ?!」

眩しい光が辺りを包み、反射的に眼を閉じた愛羅達。
光が止み、そつと眼を開けると…

『……………わた、し…一体…?』

瞳に完全に光が戻った少女の霊が訳が分からないという顔で立っていた。

第3夜 旋律08

『私、いつたい…?』

自我が戻った少女の霊は訳が分からないと首を傾げて辺りを見渡し、愛羅達に視線を向けた。

彼女に纏わりついていていた影も消え去り、残りの影もピアノに纏わりつくだけで、こちらに仕掛ける様子は見せなかった。

「意識が戻ったんだね？」

『あの、いつたい何が…?』

「お前、操られてたんだよ」

紅弥の言葉に、少女は目を見開いた。

そんな彼女に、愛羅はこれまでのことを話した。

強制的に彼女が怨霊化されていたこと。

彼女の弾くピアノが人を自殺に追いやるうとしている事。

そして、彼女に纏わりつく“影”と傍に描かれた“陣”の事。

始めこそ驚いていたものの、少女は話を真剣に聞いていた。

『…それは、ご迷惑おかけしました』

全ての話を聞いた後、少女は深々と頭を下げた。

どうやら彼女は、元々真面目な子らしく、知らず知らずとはいえ自分が迷惑をかけていた事を悔やんでいた。

そんな彼女に、愛羅は「大丈夫」と優しく声を掛けた。

「それにしても…君は何でこんなところに？」

そう問うと、少女の視線はピアノに向けられ、寂しそうに笑った。

『私、ピアノが大好きなんです。将来はプロになりたいくて…、だれど大事なコンテスト前に事故で死んじゃって…』

「それで、未練が残って夜な夜なピアノを弾いていたってわけか」

『はい…まさかここまで騒ぎになるとは思わず…。ただ、ピアノを弾いていたかっただけだったんですが…』

苦笑しながら話す少女から、愛羅は微かだが、『悲しみ』を感じた。

…プロを目指している彼女にとって、チャンスであるコンテストに出られなかったことが『未練』となり、地上に縛り付ける『鎖』となってしまうているのは明白だった。

この『鎖』をどうにかしないと、今回助かった彼女でも、次回また利用される可能性が高い。

「……君は、ピアノを弾ければ満足できる？」

愛羅の言葉に、少女は一瞬きょとんとしたが、次の瞬間はあつと華が咲いたような笑顔になった。

『はい、ピアノを…強いて言えば、あのコンサート会場で弾ければ満足です』

「そう…その会場は何処？」

『龍ヶ崎コンサートホールです』

「…琥珀」

「はい」

「今すぐ家に戻って、あの人に『龍ヶ崎コンサートホールを貸しきり』にするよう伝えてくれ」

「分かりました」

琥珀は小さく頷くとその場からフツと消えた。

「愛羅、こいつを浄化する気か？」

「うん、このまま放っておくと、また利用されかねない」

「けどこいつ、ここに『縛られてる』…『自縛霊』だろ」

紅弥の言葉に、愛羅は頷く。

この少女は『自縛霊』それは間違いない。

ここに…この『ピアノ』に強く思い入れがあるのか、あのピアノからは離れられない。

「だけど…依り代があれば別」

「依り代？確かに、それがあれば移動も出来るけど、そんなのここにはないだろ」

「ないなら、作ればいい」

愛羅はそう言うと、紫苑を呼び、小さな兎の人形をポケットから取り出した。

「紫苑、『コレ』を依り代に出来る？」

「勿論、愛羅が持ってたから、依り代にするには最高の器」

任せて、と人形を受け取り力を込める紫苑。
その様子を、少女は不思議そうに見ていた。

第3夜 旋律09

「……愛羅、出来た」

「うん、上出来だ。ありがとう紫苑」

力を込め終わった紫苑は、依り代となった人形を愛羅に手渡した。受け取った依り代を、今度は少女の方へ差し出す。差し出された人形に、少女は首を傾げ、愛羅に視線を向けた。

「これに手を添えて。中に入るイメージをしてごらん」

愛羅は優しい声でそう促すと、少女は恐る恐る手を人形に添えて、言われたようにした。

すると、少女の体は見る見るうちに人形へ吸い込まれていき……とうとう彼女は人形の中へすっぽりと入ってしまった。

その途端、ポンツと音を立てて人形が、先程までの彼女の姿と大きさに変化した。

少し違うとすれば、髪の間からぴよこんつと生えてるウサ耳ぐらいだ。

『えっ？えっ？ウサ耳？？』

「うん、まずまずかな。依り代の元が兎の人形だから、ウサ耳が残っちゃったみたいだけど」

ぴよこんつとその存在を主張するウサ耳に触れながら、愛羅は苦笑する。

即席で作った依り代で人型に変化できただけ上出来か……とも思った

が、やはり少し悔しい。

『私…触れる？』

ペタペタと周りにある楽器に触れながら、少女は驚いていた。今まで幽体だったから、『物に触れる』ということは出来なかった。それが、驚きに拍車をかけているんだろう。

「今の君は『依り代』という器に入ってる状態だから、物に触れることは可能だよ。勿論、ピアノを弾くことだって出来る。ただし、一時的な器だから、『生き返る』なんてことは出来ないけど」

『ありがとうございます』

「お礼を言われることじゃないよ。えと、君の名前は？僕は緋守愛羅」

『あつ、私は白城花音シラキカノンです。そちらの方は…？』

「ああ、僕の式神の紫苑と紅林。この子は相棒の焔。あつちは、従兄弟の紅弥とその式の律と炎珠だよ。紅弥、挨拶ぐらいしなよ」

「…緋守紅弥」

愛羅に促され、どこか不服そうに名を告げる紅弥に、愛羅は苦笑を零す。

もう少し素直になれないのかよ…、と律が呟いたが、幸いなことに彼の耳には入らなかった。

『緋守……？えと、お二方はあの有名な『緋守家』の方々なんです

か？』

「よく知ってるな。確かにこいつらは、その『緋守家』の人間だ」
焰の言葉に、少女 花音は「そうですか」と軽く頷いた。

『有名ですから…物の怪（私達）の間では特に』

「ああ、お前達にとって俺達はある意味天敵だからな。知らないほうがおかしい」

紅弥は素っ気無く告げると、コツコツと部屋から出ようとした。

「紅弥、どこ行くの」

「どこって…決まってるんだろ、そのコンサート会場だ」

「…紅弥、急いで上手く行く事も上手く行かないよ？」

余裕そうな態度を見せる愛羅に、皇夜は眉を顰めた。
今の状況は、余裕なんて持つことが出来ないはずだ。
あの少女だって、何時また負の力に侵されるか分からないというのに。

それなのに余裕なのは、お前にそれだけ実力があるからって言いにくいからか、と紅弥は心の中で毒づく。

「お前は随分と余裕そうだな。いくら依り代に入ってるとはいえ、何時また負の力に侵されるか分からないっていうのに」

「余裕ってわけじゃないけど…帰ってくるのを待ってるんだよ」

紅弥の刺々しい言い方に愛羅は苦笑を漏らすしかなかった。彼の言い分も分かる。

事実、愛羅には『余裕』なんてものは全然ない。何時また負の力が彼女を侵し始めるか分からない、時間が勝負だ。だからこそ、愛羅は『彼女』が帰ってくるのを待っている。

「待つてる？」

いったい何を、と言いたげな紅弥に、愛羅は小さく笑って視線を上あげた。
するとそこに大きな鏡が出現し、中から琥珀が現れた。

「お帰り、琥珀」

「ただいま戻りました、愛羅。例の件はあちらで進めてくれるそうなので、そのまま現場まで行けとのことです」

「そう。なら、いつもの通り頼むね琥珀。紅林は一旦戻って」

「また後でね、愛羅」

紅林はそう一言言い残しフツと消えた。いや、宝玉へ戻ったというほうが正しい。

「成る程、琥珀の『移動能力』を使うのか。確かに、足で赴くよりそいつの力で飛んだほうが早い」

「だから待ってたんだよ。言っとくけど、今の僕には余裕なんてものひとかけらも残ってないからね。ああ、勿論紅弥も連れて行くか

ら式達を一旦還しなよ」

「…律、炎珠、一旦戻れ」

「おう、後でちゃんと呼べよ」

「…ふん、呼んだら来てやらなくもない」

二人も一言残し、フツと消える。

それを見届けると、焰は愛羅の肩に飛び移り、愛羅は左腕で紫苑を抱えた。

「花音、君も行くんだよ」

ほら、と差し出された愛羅の右手に、花音は恐る恐る手を添えた。そんな彼女の手をきゅっと握り、ふんわりと笑って見せた後、愛羅は琥珀に視線を向けた。

「琥珀」

「分かりました。道を開けます」

ヴォンツと、先程よりも大きな鏡を造り出す。

愛羅達は、その鏡の中にずぶずぶと入っていく。

全員が鏡の中に入った瞬間、ヒュンツと鏡は消え、その場は静寂に包まれた…。

第3夜 旋律10

ヴイン．．．と琥珀の能力により龍ヶ崎コンサートホール前に着いた愛羅達は、会場の扉に手を掛けた。

バチツと微かに火花が散り、愛羅の手は弾かれた。

それを見た愛羅は、眼を見開く。

「!?!」

「どうした?」

「……焔、もしかしたら…首謀者に会えるかもしれないよ」

「どういうことだ?」

愛羅の言葉に、焔は訳が分からないといった表情で愛羅を見上げた。

「……扉に、術が掛けられてた。多分、『力ある者』以外を中に入れないようにする為のものだと思う」

その一言に、焔は驚きを隠せなかった。

力を使った気配は感じられない。

しかし、愛羅は『術』が掛けられていたと確かに言った。

『術』をかけた名残を残さないとすれば、相当な使い手の筈。

本当に厄介なことになった、と焔は心中で溜息を盛大に零した。

「どうしたんだ、愛羅。入らねえのか?」

「いや、なんでもない」

紅弥の声に軽く首を横に振り、扉を開ける。

ギギギ・・・と重い音を立てながら大きな扉は口をあけた。

「花音、おいで」

「は、はい」

花音の手を引き、中へと誘導する愛羅の後ろを紅弥達もついていく。中は市の中で一番大きいコンサートホールだけあってかなり広く、ステージも広い。

「あのピアノだね？」

「は、はいっ。あのピアノです」

花音はステージに置かれているピアノに駆け寄った。その顔は本当に嬉しそうで、愛羅は知らず知らずのうちに微笑んでいた。

「愛羅：紅林を呼んでおけ。何が起きるか分からん」

「うん、紅林、出ておいで」

愛羅の声に応える様に紅玉が光りだし、紅林が姿を現した。姿を見せたと同時にキョロキョロと周りを見渡す紅林に、愛羅は首を傾げた。

「紅林？どうかした？」

「愛羅…この空間、変よ。琥珀も紫苑も感じるでしょう?」

紅林の言葉に、琥珀も紫苑も頷いた。

「ええ…このこと“外”の流れが…微かに違います。それに…本当に微かですが『魔力』も感じ取れます」

「どうやら、ここ(コンサート会場)を隔離されたみたい。私達は、閉じ込められた」

「隔離…?」

紫苑の言葉に、愛羅は眉を寄せる。

つまり、今この中は外からの干渉を全く受けない反面、こちらからも外部と接触できない、ということ。

ここで何が起ころうとも『外』に影響は起きない。

そう考えれば、一つの可能性に結びつく。

「……………畏?」

「そう捉えても宜しいかと…。ただ、あちら(人間界)から切り離されただけで私達の本来あるべき世界(異世界)との繋がりには断ち切られておりません」

「でも、それも時間の問題だよね…。紅弥、話聞いたでしょ? 式を喚べるだけ喚んでおきなよ」

「…律、炎珠出て来い」

紅弥の言葉にしゅんつと姿を現した律と炎珠は、出てきた瞬間顔を歪めた。

どうやら、彼らにもこの異様な空間を感じ取れるようだ。

「何か変な空間に閉じ込められたな、紅弥」

「……心地が悪い。色々な力がぶつかり合って歪んだ空間みたいだな」

炎珠はそう呟いて、ぎろりと紅弥を睨みつけた。

こんなところに呼ぶな、と言いたげなその眼光に、紅弥も負けじと睨み返す。

バチバチツと音が鳴りそうな睨み合いを続ける2人に、律は苦笑を浮かべるだけ。

愛羅達はどういうと、もう慣れたのか放っておくことにしたようで、見向きもしない。

『あ、あの…』

「ん？何？」

『その、弾いてみていいですか…？』

先程からずっとピアノを眺めていた花音が遠慮がちに問う。

その視線はちらちらとピアノに向けられ、とても愛らしい。

愛羅はそう思いながらも、了承の意を返す。

元々ここに来たのは、彼女の為だ。

彼女の思つとおりにしたらしい。

そんな内容を伝えると、花音は本当に嬉しそうに笑った後、ピアノに指を滑らせた。

ポロロン・・・とピアノの音が、会場に響き渡った。

その音は以前のような悲しみはなかった。

第4夜 現れた敵01

旋律が流れる中、周りに警戒をしていた愛羅達だったが、異変は無い。

只、隔離された空間は戻ることもなく愛羅達を『外』と断ち切っている。

意味もなく閉じ込めるはずは無い。

何かしら相手は行動を起こす気だ、と愛羅達は気を張り詰める。

「愛羅…気を抜くなよ」

「分かってるよ、焰。いつ仕掛けてくるか分からない」

愛羅と焰は小さく頷き合うと、視線を花音へ向けた。

彼女は、それはそれは嬉しそうにピアノを弾いていた。

鍵盤の上を滑る様に動く指先は楽しそうで、見ているこちらも楽しくなりそうだ。

彼女が、本当にピアノが大好きだというのが良く分かる。

だからこそ、愛羅は許せなかった。

彼女のピアノに対する『愛情』を、まんまと利用したこの事件の首謀者が。

純粋な彼女を『負』で染め上げていた術者が。

「絶対…捕まえてみせる」

ギリツ…と強く手を握り締め、愛羅は誓う。

もう、彼女を利用なんてさせはしない。

愛羅の瞳は、決意で煌いていた。

*

そうこうしてるうちに花音は弾き終わったらしく、音色は止んでいた。

余韻に浸っているのか、彼女は暫く瞼を閉じたままその場から動かなかった。

「…満足したか？」

紅弥の問いに、パツと瞼を開き彼女は嬉しそうに笑って頷いた。心底嬉しそうな顔を浮かべる彼女に、紅弥もどうして良いのか分かつた。「良かったな」と声を掛けるだけに留めた。

「『上』へは行けそう？」

『はい、愛羅さんたちのおかげで未練も消えましたから』

「そっか。じゃあ、僕が君を『上』に送ろう」

愛羅は小さく微笑んで掌を彼女の額に添えた。

「天原に神留り坐す、皇親神漏岐、神漏美の命以て、八百万神等を神集えに集え賜い、神議り賜いて……天つ神、国つ神、八百万神等共に、聞こし食せと白す」

愛羅の唱える被詞に、徐々に透けて依り代が見え始めた花音の体。この様子だと彼女は直ぐに浄化できる、と愛羅達が思った。

しかし

「させないよ」

ヒュンツと何処から飛んで来たか分からない一枚の札が彼女の後頭に張り付いた。

「邪なる風に吞まれて……内なる闇を解き放て」

『いやああああ!! ああああつ!!』

何処からともなく聞こえてきた呪詛に応える様に、浄化しかけた花音の体に黒い電流のようなものが走り、彼女に苦痛を与える。彼女は苦しそうに呻き、その場に座り込んだ。

「花音!!」

「愛羅、浄化だ!!」

焰の声に、愛羅は頷くとかなり長い数珠を取り出して、彼女にかけた。

その間も、黒い電流はバチバチと彼女を蝕んでいく。

「ちはやぶる神の御手を翳さば、悪鬼怨霊の影掻き消えて……怨敵の呪いの息を打ち祓え!!」

『うつ……あああ……つ!!』

シユウウウ……と彼女を縛り付けていた電流が消え、彼女に張り付いていた札もボツと燃えて灰になった。

「花音、大丈夫？」

『は、はいっ…なんとか…』

こくと頷き答えるも、彼女はかなり気を消耗したのかぐったりと
していた。

このままでは、また負の力に取り込まれてしまう。

そう判断した愛羅は、先程使った数珠を彼女に持たせた。

絶対に手放すなと告げると、彼女は素直に頷いた。

「この呪は……」

「間違いなく、呪詛だ。このタイミングを狙ってたみたいだね」

「　　そうだよ、折角使える駒を見つけたのに、消されちゃ堪らな
いからね」

唐突に聞こえてきた見知らぬ声に、愛羅達は警戒を露にして、辺り
を見渡した。

「っ誰?!」

愛羅の声に応える様に二階の客席に現れたのは一人の少年。

明るい茶色の髪に藤色の瞳で、黒いチャイナ服を身に纏っている。

その特徴的な少年は口元に笑みを浮かべて愛羅達を見下ろしていた。

「やあ、初めまして、かな？緋守家の次期当主、並びに緋守家分家次期当主殿」

第4夜 現れた敵02

「やあ、初めまして、かな？緋守家の次期当主、並びに緋守家分家次期当主殿」

少年は嘲笑いながら、愛羅達へ視線を向ける。

明るい茶色の髪に藤色の瞳に、見覚えがあった。

「その髪に瞳：君は地藤家の一族だね」

「その通り、次期緋守家当主殿。僕は地藤^{ジトウ}大樹^{タイジュ}、地頭家現当主の弟だよ」

「地藤家か…まさか、お前ら一族が関わっていたとはな。厄介なはずだ」

紅弥は大樹を睨みつけながら吐き捨てた。

大樹も紅弥を睨みつけ、手すりの部分に立ち上がった。

「分家当主殿も関わってるとは思わなかったよ。君達が仲悪いのは僕達の耳にも入っていたからね。今回も、君達が仲違いをして有耶無耶になってくれるのを期待してただけど…旨くないもんだね」

緋守家当主殿だけでも手一杯なのに、全く面倒を起こしてくれる、と不機嫌そうに溜息と共に放たれた言葉に、愛羅は大樹を見据えた。

「今回の件は、君達が主犯と見ていいんだね」

愛羅の言葉に、大樹はニヤリと意味深な笑みを浮かべる。
その表情に、ゾクリと悪寒を感じた。
深い闇を抱えたその瞳から、眼が離せない。

「勿論、今回の件は僕達地藤家の仕業だよ。数百年前、神子によつて封印された『夜叉姫』を手に入れるためにね」

「夜叉姫…ですって?!」

「まさか、アレを目覚めさせるなど…正気ですか?!」

「…愚かな」

「三人とも、何か知ってるの?」

『夜叉姫』と聞いて口々に言う式神達に問えば、紫苑が愛羅に話し始めた。

「『夜叉姫』…数百年前、その身に『白鬼』を宿し生まれた娘。生まれながらに『鬼』としての力を持ち合わせ、『神通力』をも使いこなす破壊神。本気を出せば…世界を掌握するのも簡単な事」

「そんな…って事は、地藤はその子を使って世界を掌握するつもり?!!」

「その通り。あの力さえ手に入れば、こんな世界など簡単に手に入る」

「世界を手に入れてどうするつもりだ?」

紅弥の問いに、大樹は嘲笑を浮かべ

「そんな事、君達には関係ない。話す必要ないだろ？」

と言い放つ。

いったい地藤家は何を考えているんだ、と愛羅達は眉を寄せる。
この世界を掌握して何の意味がある？

愛羅達の考えを読んだのか、大樹は更に嘲笑う。

「考えたって無駄だ。君達には想像できないよ、僕達の考えなんてね」

そういつて懐から一枚札を取り出すと

「闇に飲み込まれてしまえ」

その言葉と共に放たれた札は、花音に当たる。

『ぎゃあああああ！！！！』

花音に悲鳴と共にブチンツと数珠が切れ、ばらばらと床に落ちる。

花音自身は、黒い影に飲み込まれ、消えてしまった。

そこに残っているのは、彼女の依り代と使用していた人形だけ。

「なっ?!」

驚く愛羅達を他所に、大樹はニッコリと笑い

「言ったとおり、彼女を…駒を返してもらったよ。君たちにこれ以上邪魔されるのもなんだし、これと遊んでいてよ」

そう言っただけで放たれた札から召喚されたのは

「グルルルル…」

巨大な大蛇だった。

「大蛇…それもかなり大きい」

「ふふつ、その子はそこら辺の式よりずっと丈夫で好戦的だ。君達にはぴったりだろう？せいぜい死なないように頑張つてよ」

ひらひらと手を振って、フツとその場から大樹は消えた。残されたのは、彼が用意した大蛇と愛羅達。

「こいつを倒さないと、ここからは出れないみたいだな」

焰はそう告げるとボウツと炎に包まれて、本性に戻った。蒼銀の毛並みに蒼い焰を纏わせ、金色の瞳が大蛇を射抜く。本性の姿に戻った焰はかなり大きい。

4尾の尾のうち一つで、愛羅を護るように包み込む。

「焰が本性に戻るなんて久しぶりだね。それぐらい、アレが強いってこと？」

「…あいつは水神の類、小さいままだと少し不便だ」

愛羅の問いに、焰は唸りながら返す。

「水神って事は、お前にとって不利な相手なんじゃないのか狐」

「黙れ小僧、俺を誰だと思ってる。アレぐらいの小物、相性なぞ関係ないわ」

紅弥の皮肉に地面を這うような低い声で返す。

紅弥の言ってる事は正しい。

けれど、それは焰にはあまり当てはまりはしない。

焰は『空孤』と呼ばれる妖狐であり、神に近き存在。

一方相手は『水神』の類のものだが『水神』そのものではなく、焰から見れば下等な妖らしく相性なんて関係なく潰せると言うわけらしい。

「…紅林達じゃ駄目なの？」

「紅林達は、まだこの先色々やってもらう事があるだろう。こんなところで、力を使い切られると困る」

焰の言い分に、紅林たちも頷く。

「私達でも、アレの相手は可能だけど…大量の魔力を使っちゃうわ」

「この先を考えると、ここは焰さんに任せた方がいいかと」

「…私もそう思う」

三人にそう言われ、愛羅は「わかった」と頷いた。

確かにこの先、あの大樹と対峙する際に彼女たちの力を頼る事にな

る。

こんなところで力を使うよりかは、温存させた方がいい。

「頼むよ、焰」

「任せとけ」

ポオツと、焰を包む焰の勢いが増した。

第4夜 現れた敵03

グルルル．．．．．と両者の睨み合いは続く。
お互い牽制しあっているのか、中々動かない。

緊迫した空気の中、先に動いたのは敵の方だった。

「シャアアアツ！！！」

ブウンツと巨大な尻尾を愛羅達に叩きつけるように振り下ろす。

「ちっ」

「うわっ?!」

クルンツと尻尾を愛羅と紅弥に巻きつけて、焰は高く飛び上がり二階へ降りて大蛇の攻撃をかわす。

愛羅達から尻尾を離すと、大蛇を鋭く睨みつけた。

尾が叩きつけられた場所は、かなり深くまで沈んでいる。

あの一撃を喰らうとひとたまりもないだろう。

「焰っ」

「心配するな、愛羅。俺は『空孤』だ、そう簡単にやられはしない。
大人しく、ここで見ておけ」

不敵に笑って見せ、焰は再び相手と対峙する為、下へ降りていく。

正直、愛羅は不安で堪らなかった。

焰を信じていないわけではない。

彼は、確かに強く、賢い。

それは愛羅自身よく分かってた。

けれど、大蛇は『水』の眷属。

いくら焔にとつて『小物』でも不利な相手には変わりない。

「焔、無茶しないでよ…」

「……愛羅、お前はどっ思うっ？」

不安げな視線を焔に向けていると、唐突に問われた。

その意図が分からず、愛羅は「どういう意味？」と視線を焔から紅弥に移した。

「言っておくが狐のことじゃない。…あいつなら余裕で勝てるだろ。そうじゃなくてさっきの餓鬼のことだ」

「餓鬼って…僕達とあんまり変わらなかった気がするけど」

「あんなのは餓鬼で十分だ。あの餓鬼は『地藤家』と名乗った」

「ああ…僕達と同じ、裏御六家の内の一家…『地』の力を借りての退魔を得意とする家系だったっけ？」

愛羅の言葉に紅弥は頷く。

「そうだ、そして三神器を管理する家の一つ。何故、そいつらが『夜叉姫』を必要とする？」

「あの子が言ってた通り『世界を手に入れる為』なんじゃないの」

「世界を手に入れて、何のメリットがある？」

「……さあ？」

「…多分、あの餓鬼達には別の目的があるはずだ」

確信めいたように話す紅弥に、愛羅は考え込んだ。

確かに、世界を手に入れたとして、その後どうするのか…考える事も想像する事もできない。

だが、別の目的があるとしてもそれがなんなのか、分かるはずもない。

「それは、この事件を追ってればおいおい分かるんじゃない？…それよりも、僕も一つ聞きたいんだけど」

「何だ？手短かに話せ」

「何で、あの子は君を『緋守家分家次期当主』なんて呼んでたの？君も、緋守家当主候補だったよね？」

愛羅の問いに、ピタリと動きを止める。

彼の式達も顔を強張らせた。

「どづいこと？話してくれるよね？」

詰め寄るように畳み掛けてくる愛羅に、紅弥は小さくため息をついて口を開いた。

「…俺は『緋守家当主候補』を辞退して『緋守家分家次期当主』に任命された。只それだけだ」

「辞退つて…何で？」

「俺は、元々分家の人間。『本家当主候補』に名前が挙がったことのほうが異例なんだ。まあ、それも『現当主』による『お前を覚醒させる』為のものだったわけだが」

「つまり…元々君は『本家当主』になれるはずがなかったってこと…？」

「そうだと言ってる。と言つよりも、次期当主はお前が生まれた時から既にお前で決定してる。それなのに『候補』とか言い出したのは、お前の覚醒を促す為。失敗に終わってるがな」

「あの、狸の計画だったと」

現当主であり父親である灯火を『狸』呼ばわりはどうかと思つたが、あえて指摘はしなかった。

正直、紅弥も灯火に対して不満がある。

自分を愛羅の好敵手に仕立て上げるのは別に良い。事実、紅弥にとつて愛羅は『好敵手』と呼ぶに相応しい相手だし、候補じゃなくてもお互い好敵手になっていたと言える。

しかし、自分を捨て駒のように使おうとしたそのやり方が気に食わない。

「あの狸…この件が終わつたら一発殴つてやる」

「…俺も手伝つ」

このとき、確かに二人の間に堅い友情が芽生えた。

第4夜 現れた敵04

愛羅と紅弥の間に友情が育まれている頃、焰と大蛇は互いに睨みあい、威嚇していた。

お互い相手の動きをみているのか、微動だにしない。

「言葉も話せない三下が、俺に刃を向けるとはな」

「シャアアツ！！」

焰の挑発を真に受け、先に動いたのは大蛇の方だ。ブンツと尾を先程と同じように焰へ向けて振り下ろされる。

「同じ事しか出来ないのか、やはり三下だな」

そう嘲笑いながらゴオツと焰の壁を作りだし、大蛇の尾を跳ね返す。

「シャアツツ」

跳ね返された大蛇の尾は、焰の壁によってジュウウツと音を立てて焼き爛れていた。

「グルルルル・・・」

大蛇の睨みに、焰はフンツと鼻を鳴らす。

『水の眷属』であろうと、焰の炎に耐えられるのは稀。

それほどに焰の力が強く、妖の中での地位が高いということ。

悔しそうに唸る大蛇も自分と相手の力の差を感じ取ったのだろう、それ以上攻撃をしようとはせず頭を垂れた。

「おい。どうやら、結界が解けたようだぞ」

紅弥の言葉に視線を扉の方へ向けると、扉は完全に開いていた。どうやら、この空間の鍵の役目を担っていたのは先程の大蛇だったようだ。

それが焰によって消え去り、鍵を失った結界が姿を保てなくなり解けた…ということだろう。

「早く、旧校舎に戻らないと…!!」

「ああ。『夜叉姫』を目覚めさせるわけにはいかないからな」

「お前らぐだぐだ喋ってないで乗れ。急ぐぞ」

再び元の姿に戻った焰の声に伝えるように、二人は焰の背に飛び乗った。

「行くぞ!!」

2人が乗ったのを確認した焰は駆け出そうとした。

が、キーンツッと甲高い音共に焰達の前に現れた結界。

不意に現れた結界に、焰は舌打ちを打ち、愛羅は眼を細めた。

「姿を見せたらどう?」

愛羅の声に伝えるように出てきたのは、蜂蜜色の髪に藤色の瞳の青年だった。

その姿を見た愛羅達は、剣呑さを増した。

青年の持つその『色』は、先程出会った少年と良く似ていた。

「……君は、誰？」

愛羅の問いに、青年は藤色の瞳に憂いを浮かべ、名乗った。

「地藤、大樹」

第4夜 現れた敵05

「地藤…大樹…?!」

青年が名乗った名は、先程少年が名乗った名と全く同じ。いったいどういうことだ。

何が起きてるんだ、と愛羅も皇夜も困惑気味に青年を見やる。

「お前、本当に『地藤大樹』か？」

「……そう、僕が『地藤大樹』…地藤家、現当主」

『地藤家当主』の言葉に、愛羅達は眼を細めた。

彼が、地藤家の当主と言うのが本当なら、態々彼が出てくる理由があるはず。

それに、何故先程の少年と『同じ名』なのか。

「……先程、地藤家当主の弟君と名乗る少年に会った。しかも、その少年が名乗った名は、あなたが名乗った名と同じ名だ。これはどういうことだ？」

愛羅が剣呑さが増した瞳を青年に向けて問うと、青年は藤色の瞳をゆらりと憂いを浮かべ

「……僕に、弟なんていない。ましてや、同じ名前なんて…いるはずがない」

青年がそう告げると、ますます困惑する愛羅達。

目の前にいる青年が『本物』の当主であるならば、先程の少年はい

つたい何なのか。
其れを考える為には、『目の前の彼』が『本物』であるかどうか確かめる必要がある。

「失礼だが、僕達はあなたが『本物』かどうか知らない。本物なら『地藤家当主』の証を持つてはるはずだ。其れを見せて欲しい」

愛羅がそう告げると、青年は首から提げていたペンダントを愛羅達に見せた。

そのペンダントに使われている宝玉には、確かに地藤家の家紋が彫られていた。

「確かに『地藤家当主』の証：『家紋入りの破邪の首飾り』だ。

その首飾りは当主以外触れる事は適わない。確かにあなたは『地藤家当主』：先程は失礼した。僕は、緋守家次期当主の緋守愛羅」

「俺は、緋守家分家次期当主の緋守紅弥だ」

焔から降りて、礼儀を持って名を告げる二人。
そんな彼らに、地藤家当主は微かに微笑んだ。

「御二人方の噂は、聞いている。君達の、実力を見込んで：頼みたい事がある」

「頼みたい事？」

青年 大樹の言葉に、愛羅達は首を傾げた。

地藤家は緋守に匹敵する家系だ。

しかも彼はその家の当主、力もかなり強い。

そんな彼が頼み事とは、珍しいなんてものじゃない。

「…君達の前に現れた、僕の名を…地藤家の名を語った少年を、止めてほしい。彼は、地藤家の者じゃない」

「と言う事は…今回の件に関して地藤家は関わっていない、と」

「そう。地藤家にとって…『夜叉姫』は『憎しみ』の対象。まず、目覚めさせようとなんてしない…『消滅』させようとする事はあっても、ね。けれど、ここ最近『地藤家』の名を名乗って封印を解こうとする者がいる、と報告を受けて…まさかと思つて、張つてたんだ。そうしたら、あの少年を見つけて…。まさか自分の名を語られるとは、思いもよらなかつたけど」

苦笑を浮かべ、大樹は一本の巻物を愛羅に手渡した。

「これは……？」

「僕の家の方が、手に入れてきたものだ。どうやら、あの少年の物らしい。僕が彼の止めればいいんだろうけど…」

其れが出来なくて…と困つた顔をする彼に、愛羅は悟つた。

「大樹…あなた、まさかとは思つが…『呪』を受けてるのか…？」

愛羅がそう尋ねると、大樹は一瞬驚いた顔を浮かべ直ぐにへらりと笑みを浮かべた。

「流石…緋守家次期当主、稀なる才能を持った者、だね。そう、僕はその少年に『呪』を掛けられてる。その所為で『あの場所』には近づけないし、『彼自身』にも近づけない。けれど、『地藤家』の

者達には彼に立ち向かうだけの力がない。だから、君達に託したい……ダメかな？」

「…分かった。この件に関して、僕達は既に依頼を受けている。今更、依頼が増えたところでどうって事はない。その少年のことは、僕達が引き受ける」

「ありがとう…、僕は、今回手は貸せないけどよろしく頼むね」

「ああ」

しっかりと頷く愛羅達に、安心したように笑みを浮かべ、大樹はフツと姿を消した。

彼が立っていたところには、一枚の紙人形が落ちていた。

「先程の彼は、紙人形を通してこちらにコンタクトを取ってきたんだな」

焰の言葉に愛羅は頷いた。

彼自身は『呪』を掛けられている所為で、邸から離れられないのだろう。

だから『紙人形』に自分の魂を乗せてコンタクトを取ってきた。つまり、其れほどまでに事態が深刻、という事。

「焰、紅弥、旧校舎へ急ごう」

愛羅の言葉に、二人とも頷いた。

第4夜 現れた敵06

焔の背に乗って旧校舎急ぐ愛羅達。

「…さつき渡された巻物、いったい何が書いてあるんだ？」

「見てみる？」

そう言つて、愛羅は巻物の紐を解き、少し開いてみた。

「これは……………！！！！」

そこに書かれていたのは、あの少年が夜叉姫を使って起こそうとしている『計画』の詳細だった。

「焔、急いでっ。彼に『夜叉姫』を渡すわけには行かない！！」

「おい愛羅っ、いったいなんて書いてあつたんだ？！」

凄まじい気を纏いながら指示を出す愛羅に答えるように、走る速度を上げながら問う。

しかし、答える余裕がないのか愛羅は何も言わない。

これ以上聞いても答えないだろうと踏んだ焔は、走る速度を最速にし旧校舎へ向かう。

「これは……?!」

「空間が、歪んでるっ?!」

「しかも、禍々しい気で満ちてるな……」

到着した愛羅達の瞳に移ったのは、すっかり変わり果てた旧校舎の姿だった。

禍々しい気を纏い、空間の歪みが目視出来るほど酷い。そして、彼らの耳には一つの旋律が流れ込んできた。

「この音は……」

「花音、だ。そうか、あの子が花音を『駒』として態々迎えに来たのはこの為か」

「そうだろうな。あの女の音に呪力を乗せて、この土地全体に流し込み、空間に歪みを生ませる。そこからまた歪みを生み……この世界を向こうの世界と完全に繋げようって魂胆か」

そんな事したら普通の人間は死滅するぞ、と苦々しげに焰は言った。

その言葉に、紅弥は眉を寄せ、旧校舎を睨みつける。そうこうしている間にも歪みは徐々に広がっていく。

「それが目的なんだよ、あの子の……。あの子は、夜叉姫を使ってこの世界を『向こう』と完全に融合させ、人間を一掃させるつもりだ」

「…そんなことしたら、そいつ自身危険なんじゃないか？まさか、俺達のように『向こう』に対抗する術を使うのか、そいつも？」

「…術は多少なりとも使えるだろうね。さつき式を出したのが良い例だ。だけど違う、彼は根本的に『僕ら』とは違うんだ」

「…それはどういう」

「話は後で。今は、花音を助けて『歪み』をこれ以上進めないようにしないと」

そう言つて旧校舎の中に入っていく愛羅に、紅弥達も急いで続く。進んでいく中、次々と歪み『向こう』と繋がっていく空間に、愛羅は険しい顔をした。

このままだと、世界が融合してしまうのも時間の問題だ。それは避けなければならぬ、と愛羅は旋律の聞こえる方へ足を進めていく。

「…ここだ」

旋律の元凶…花音の奏でる音が聞こえてきたのは、音楽室。歪みの酷い空間の中で、まだ正常を保つ音楽室に違和感を覚えながら扉を開ける。

ガラスと扉を開けて眼に飛び込んできたのは、苦しそくに音を紡ぐ花音と…

「やあ、遅かったね」

ニヤリと笑う少年と、少年の腕に抱かれた…白銀の少女。
その少女は『あの時』皇夜の邸で見た少女だった。

「その子はっ……！！」

驚愕する愛羅に、少年は笑みを浮かべたまま告げた。

「この子が、僕が求めていた　『夜叉姫』だ」

第4夜 現れた敵07

「その子が…夜叉姫…?!」

愛羅は信じられないといった様子で琥珀達に視線を向けた。琥珀達も思いがけなかったのか、目を見開いていた。

「正直に言えば、『夜叉姫』の成りぞこない、かな。この子が覚醒する前に『冥府の使い』とやらに封印されてしまっていたからね」

その言葉に、あの時皇夜が何故話してくれなかったのか、その理由を悟った。

「……その『なりぞこない』とやらをどうする気だ」

紅弥の言葉に、少年はニイツと意味深な笑みを浮かべ、少女の頬を撫でた。

「まだこの子は『眠った』状態だからさ。…彼女を利用するにしても、まずは起こしてあげなきゃならないでしょ？だから、あの駒が必要なんだ」

少年はそう言って、花音へ視線を向ける。

花音は苦しそうに顔を歪めながらも、指を鍵盤に滑らす。その指が奏でる音は、聞いた事のない戦慄を奏で始めた。不協和音で耳障りとも言えるその旋律は、愛羅達の脳に直接響いてくる。

「くっ、何だこの旋律は……！！！！」

「頭が、痛いっ」

「これは……まさかっ?!」

部屋に響く旋律に、焰は険しい顔で少年を睨み付ける。

少年は、面白そうに笑みを浮かべると

「そうだよ、この旋律は『呪歌』…呪いの歌と呼ばれる曲だよ。その旋律には呪いが込められてる…それに僕の呪力も上乘せしてるからね、強烈だよ。『夜叉姫』の目覚めには最高でしょう?」

クスクスと邪気を含んだ笑い声と共に放たれた言葉に、焰は顔を顰めた。

「その曲は、数百年前に封じられたはずだ。何故、それを知っている?お前は、誰だ?」

焰はボツと身体の周りに焰を生み出しながら問う。

そんな彼の様子に、愛羅は彼が焦っているのを感じ取った。

いつも余裕綽々の彼が、焦るなんて珍しい事。

それ故に、彼女の『目覚め』が『恐ろしい事』なのだと感じ取れる。

【 羅、愛羅】

「え…皇、夜?」

何処からともなく聞こえた声に、視線をさ迷わせるが、彼の姿はな

い。

しかも、彼の声はどうやら愛羅にしか聞こえていないらしく、紅弥も焰も少年を睨み付けたままだ。

【愛羅、よく聞いて。彼女：彼女は、鬼の力が覚醒すると言われていた16歳の時封印したんだ。だから、彼女自身は自分が何者なのか分かつちない。無理やり目覚めさせてしまうと、自分の力を知らない彼女は、鬼の力を使いこなす事ができず、おそらく暴走してしまう】

「それって…かなりまずいよね」

【そう、だから彼女が目覚める前になるべく奪い返して、救って。万が一、彼女が目覚めてしまったら…『浄魂の笛』で力を鎮めて。目覚めたばかりの彼女なら、おそらくそれで止められるはず】

「…でも、あの子からどうやって彼女を取り戻したら…あの子に近づけない上に、花音を人質に取られているようなものだし」

【僕が力を貸すから、呪歌を笛の音色で相殺させて。後は、虚空の君の力でなんとかなるはず】

「……分かった、やってみる」

【頼んだよ…緋守の主】

皇夜の声が止むと、愛羅は懐から笛を出す。

そっと口と手を添えて、ゆっくりと音を奏でる。

浄魂の笛から奏でられる音に、おそらく皇夜の力であろう神力が交わり、部屋を満たし始める。

その力は、花音の弾く呪歌の力をどんどん消し去っていく。

「なっ?! 呪歌の呪力が…消されていく…!!」

少年は小さく見開いて、ぱつと愛羅に視線を向ける。

愛羅の手の中にある笛に気付くと、悔しそうに眉を寄せる。

「浄魂の笛…!! まさか、神器を持ち出してるとはね」

予想外だ、と少年は舌打ちをし、愛羅を睨み付ける。

「紫苑!! 花音を頼む!!」

「了解」

「させるか!!」

花音へ近寄る紫苑を邪魔しようと、少年は影を放つ。

が、ギリギリのところまで紫苑は花音を救い出すことに成功した。

紫苑の作る結界に包まれて愛羅達の元へ戻ってきた花音はかなり霊力を消費しているらしく、姿を保ちきれていなかった。

「かなり霊力を消費してる…。このままだと、消滅してしまうな」

「……琥珀、彼女に少し力を分けてあげて。消滅を防ぐ程度で構わない」

「分かりました」

琥珀は花音に触れ、身体を発光させた。

琥珀の靈力が徐々に花音に流れ込み、花音の姿がだんだんとはつきりしてきた。

会った頃と同じ程度姿を保てるようになったのを確認して琥珀は花音から手を放した。

「…流石、緋守家次期当主様、まさかここまで邪魔されるとはね。本当に、邪魔だよ」

ス……と眼を細めて少年は冷たく言い放つ。

花音が愛羅達の手元に戻った所為で、少女を目覚めさせる『呪歌』をもつ奏でられない。

「君の、本当の名前は何？『地藤大樹』じゃ、ないでしょ？」

「ああ、彼に会ったの？彼も、君と同じようにしつこかったよ。だから、ちよつと『呪い』をかけさせてもらった。彼の名前を使ったのは言うまでもないでしょ？地藤家当主の名は中々に都合良くね、当の本人も『呪い』の所為で表に出られないし、この準備するのに助かったよ」

「……君は、嘗て僕ら緋守一族と同盟を組んでいたのにも拘らず『闇の力』に魅入られ、闇に堕ちた一族：『梶子家』の者だね？」

愛羅の言葉に、ピクツと微かに反応を示した。

「……そんな事まで、調べたんだけ？そつだよ、僕は梶子くちなし魔兔李まどり…梶子家直系の三男…『妖鬼使い』」

改めて宜しく、と告げる少年 魔兔李の瞳は冷たく光った。

第4夜 現れた敵08

「梶子魔兔李…？」

「聞き覚えない？梶子家直系の三男…『妖鬼使い』って有名だよ」

「……まさか、封術師でありながら魔と契約を交わした『裏切りの一族』の…か？」

紅弥の言葉に、少年 魔兔李は眼を細めた。

藤色の瞳は藤色から牡丹色に、明るい茶髪は紫紺色に変化していく。

「それが、本来の姿…」

「そつだよ。これが本当の僕。それにしても『裏切りの一族』とは酷い言い様だよ。君達だって『使い魔』と言う名の『魔』を使役してるくせに、僕達のこととは裏切り者扱い？」

反吐が出るよ、と魔兔李は顔を顰め、ギンツと睨みつける。

「『使い魔』をお前達が契約した『魔』と一緒にしてもらっては困るな。こいつ等は言わば『聖魔』だ。そこらへんの『魔』とは根本から違う」

紅弥が言い返すと、ますます顔を顰める魔兔李。

「魔に違いなんてない、区別をつけてるのは君たちだ」

「違う、『聖魔』は、その力に封魔の力がある。けど、君達

が契約を交わした『魔』は、『邪気』の塊だ。だから、僕達の祖先は 緋守家は君達と手を切ったんだ。『魔』と契約を交わした者は… いずれ『魔』に飲まれてしまうから。それは、君達梔子家の祖先も知っていたはずだ。だけど、『魔』が持つ強大な力に魅入られ、その力に手を出した。…それは、本当に欲しかった力だった？失った物の方が大きくはなかった？」

「……だったら何？僕達は『魔』と契約を交わしたことに後悔してない、寧ろ良かったとさえ思ってるよ。緋守家次期当主…君は本当に甘いね、甘すぎるよ。優しいのは美点だと言うけれど、君のそんな甘ったるい考えじゃ、この世界で生きていくのは難しいよ？それは、嫌と言うほど経験してるはずだけどな？」

クスツと嘲笑しながら視線を愛羅に向けた魔鬼李は、懐から数枚の呪符を取り出した。

「僕は、君達に全く興味ないんだけど、兄さん達の邪魔をされるのは困るからね。君たちはここで潰させて貰う。僕達の…兄さん達の計画の邪魔はさせやしないよ。行け、雪鬼、炎鬼、土鬼」

魔鬼李の手から投げ放たれた呪符は、彼の声に応える様に、三体の妖鬼へ姿を変えた。

青と白の身体の鬼、赤と橙の身体の鬼、土色の身体の鬼。

身体は三体ともかなり大きく、本性に戻った焰よりも大きい。

「焰…どう？」

「鬼相手は厄介だな…俺の炎は鬼には効き難い。普通の鬼ならなんてことはないが、あれらは其々属性を持つてる分、俺には不利だ。

…悪い」

悔しそうに告げる焔に、愛羅は「大丈夫だよ」と告げ、視線を紅林達へ向けた。

「…紫苑、琥珀、紅林？」

「…ごめんなさい、愛羅。私達もアレ相手は不利だわ。『鬼』は『魔』に近き者であって、『完全なる魔』ではないから…私達の力は効かないわ」

「ごめんね、愛羅…私達、役立たずで」

「申し訳ありません、愛羅…」

悔しそうなそれでいて泣きそうな三人に、愛羅は首を横に振って気にしていないと告げた。

対峙している少年が『妖鬼使い』と名乗ったときから、こうなる事は薄々気付いていた。

家柄、そういう知識は幼い時から叩き込まれてきた。

だから、焔や紅林達の力が効かないという事態も予想がついていた。

「紅弥、『あの子』は制御出来るようになった？」

「『あの子』…？ ああ、『あいつ』か。呼ぶ気か？」

眉を寄せて嫌そうに問う紅弥に、愛羅は軽く頷く。

「『鬼』に対抗するなら、あの子達が一番だからね」

そういつて懐から一枚の札を取り出した愛羅に、紅弥は小さく溜息

を吐き、同じように札を一枚取り出した。

「いったい何をする気？君たちの言う『聖魔』の力はこの子達には通じないよ？」

嘲笑う魔兎李に、愛羅達は意味深に笑みを浮かべた。

「そうだね、紅林達の力はそれらには通じないだろうね」

「けど、こいつらならどうだろうな？」

愛羅と紅弥が同時に札を掲げる。

「水と風を纏いし気高き龍よ、契約者『愛羅』の名において命ず。その姿を我の前に示せ！！」

「天の雷を纏いし気高き龍よ、契約者『紅弥』の名において命ず。その姿を我の前に示せ！！」

ドオオオンツと激しい音と共に、水銀の身体の龍と黄金の身体の龍が、その巨体を愛羅と紅弥の目の前に姿を現せた。

「我を呼んだか、主よ」

水銀の龍が愛羅に近寄る。

愛羅は小さく頷くと、水銀の龍の額を撫で

「君の力を借りたい」

と告げた。

「…我を呼んだか、小僧」

「はっ、相変わらず生意気な口を利く龍だな」

「それは此方の台詞だ小僧。主がいくら我の主とはいえ、力を制御出来ねば意味がない」

「出来るようになったんだよ。それに、今回の相手はお前の力じゃないと太刀打ちできない」

意味は分かるな、と告げてくる紅弥の瞳に、黄金の龍は眼を細めた。

「我と風雅を呼んだのは、あの鬼共の所為か」

「そう言うな、雷電。いくら主の使役しているもの達が強力でも鬼の相手は出来まい。」

見たところ、あれらは属性持ち。いくら神格を持つ焰でも不利だろう」

若干イラついた様子を見せる黄金の龍　雷電を宥めるように水銀の龍　風雅は告げた。

「　成る程、ね。『鬼』に対して『龍』を引き出してきたのか」

厄介だね、と告げられる言葉とは裏腹に、魔兔李の表情には笑みが浮かんでいた。

第4夜 現れた敵09

(ん？)

魔兔李の様子に、愛羅は違和感を覚えた。

状況的には愛羅達の方が遥かに有利なものにも関わらず、魔兔李は余裕そうに口元に笑みを浮かべている。

何か策があるのか…先程から嫌な予感がしてたまらない。

「主、何か気になるのか」

耳に届いた声に、愛羅は視線を風雅に向けた。

「向こうの様子が少し…ね。状況だけ見れば、こちらが有利なんだけど……」

「確かに、あの小僧…異様に落ち着き払ってるな」

「うん…だから何か隠してるんじゃないかと思って。相手はあの梶子家だ。どんな手法を使ってくるか予想出来ないし、油断出来ない」

そういつて魔兔李を睨み付ける。風雅も愛羅と同じように視線を向けた。

「慎重にいくしかあるまい。鬼姫は未だ奴の手中にある。下手に攻撃出来ん」

「そうだね、そうなんだけど…それは難しいかも……」

ちらりと視線を横に向ける。

そこにはやる気満々の紅弥と眼をギラつかせ電流を纏う雷電の姿がある。

好戦的な二人のことだ、慎重に事を運ぶ、なんて選択肢は無いだろう。

「元々雷電は好戦的な奴だが、アレは奴の主の影響でますます攻撃的になってるな…。アレでは冷静な判断など出来ん」

深い溜息と共に呆れた視線を同胞へ向ける風雅に、愛羅は苦笑いしか出来ない。

「ここじゃあ、流石に狭いよね」

突然告げられた言葉と共にグニヤリと周りの景色が歪み、見渡すばかり荒れ果てた荒野に変わった。

「……異空間移動か。それにしちゃあ随分趣があるな」

「ふふつ、いくら異空間化したとしても元々小さな部屋のあそこじやあ暴れにくいでしょ？僕も、君達も、ね」

ここなら存分に暴れられるよ、と魔兔李は意味深に笑って紅弥を挑発する。

(あー…紅弥の奴、絶対挑発に乗っちゃっ)

案の定、紅弥は簡単に挑発に乗った。

瞳をギラつかせ、雷電へ命令する。

「雷電、お前の雷で鬼共を蹴散らしてやれ!!」

「言われずとも」

紅弥の影響で攻撃的になっていく雷電の放つ雷は、白い閃光となつてドンツと鬼達へ落ち落とされた。

肌で感じられるほど苛烈な雷を受けた鬼達は、体のあちらこちらを焦がしながらも、しっかりと立っていた。

「流石属性持ち。持ち前の属性で咄嗟に防いだんだね…そう簡単にはやられないって事か」

「それもあるが…雷電め、頭に血が上つて雷を使い分けていない。その所為で、威力も半減したのだろう」

冷静さを取り戻さねば無理だと言うのに、と呆れ果てる風雅に、愛羅も頷く。

もう少し冷静になつてくれたら、少しは状況が変わって相手の企みも分かるかもしれないというのに。

相手の挑発に乗って頭に血が上っている二人にいくら説いても無駄だろうが、言つてやりたい。

「おい、愛羅、風雅。変だと思わねえか？」

「え？焔、今更気付いたの？」

もうとつくに気付いてると思つてただけど、と今まで黙っていた相棒に思わず呆れた声で返してしまった。

その声に、焔は不愉快そうに顔を顰め

「違和感は最初から気付いていた。そうじゃなくてだな、奴ら…攻撃を防ぐだけで、こちらには手を出そうとはしない。何故だ？」

その問いに、愛羅は視線を魔鬼李に向けた。

鬼達はこちらの攻撃を防いでるものの、こちらへは一切仕掛けてこない。

殺気は凄まじい位放ってるのに、だ。

「こちらの出方を伺ってる…？」

「もしくは…何か企んでるか、だな」

でなきゃ、あんなに余裕そうにしないだろうよ、と焰は尻尾をヒュンツと振った。

「主、どうする」

「……とりあえずは様子見。今の紅弥達には何を言っても意味無いだろうし、相手の出方を見たい」

愛羅は、じっ……と魔鬼李を睨み付けて、そう告げた。

第4夜 現れた敵10

「ちっ、攻撃は防ぐくせして、何で仕掛けてこねえんだよっ
!！」

一方的とも言える攻防に苛立ちを覚えた紅弥は吼えた。
手応えの無さに苛立っているのか、地の底を這うような低い声で怒
鳴り散らす紅弥に、愛羅は心底頭を抱えなくなった。

(どうしてそんなに好戦的なのかな?!)

少しは冷静になって、と叫んでしまいそうだ。

「あいつ、馬鹿だ。学習能力無いな」

焰も呆れた視線を紅弥に向けた。

風雅に至ってはあきれ果てて何も言えない様子で愛羅の傍に控えて
いた。

「 それにしても、彼、中々動かないね……」

紅弥達から放たれる攻撃をただ防ぐだけの魔兔李達に、ふと愛羅は
呟いた。

その声に、焰も魔兔李達に視線を向け、微かに眼を細めた。

「何か策があるんじゃないか？余裕そうだしな」

「えー…策、ねえ？ ……待ってる、とか？」

愛羅の言葉に、焔は眉を寄せた。

「待つてるって何を　　つつ!!」

「主!!」

言いかけた所で、愛羅へ向けて放たれた岩石を焔と風雅が薙ぎ払う。岩石を放ったであろう魔兔李はクスクスと笑いながら愛羅達を見下ろしていた。

「ねえ、本家当主は参戦しないの？分家当主が随分苦戦してるのに」君も参戦しなよ、と言外に告げる魔兔李に、嫌な予感を感じた。確かに見る限りでは、紅弥が苦戦してると言ってもいいかもしれない。

こちらの攻撃は悉く防がれ、効果は得られていない。しかし、ただそれだけだ。

鬼達は攻撃を防ぐものの、攻撃はしてこない。先程愛羅に向けて放たれた岩石も、鬼達ではなく魔兔李自身が放ったものだ。

「　　鬼の相手は、紅弥だけでも十分だよ」

そうでしょ紅弥、と言えば返ってくるのは肯定の笑み。そのやり取りに魔兔李は苛立ちを覚えたのか、眉を寄せて愛羅を睨み付けた。

「攻撃を防がれてるのに、手助けしないの？君、冷たいんだね」

「そう思いたければ、そう思えば良い。僕は痛くも痒くもないからね」

「それに、今手を出すと逆に紅弥がキレかねんからな」

焰も愛羅に続けて言う。

魔兔李は忌々しそうに舌打ちをし、視線を鬼に向けた。

「仕方ない、雷龍とその主を殺せ」

漸く告げられた命令に、鬼達は嬉々としてそれぞれの獲物を手にした。

「やっと本気を出すのか」

待ちくたびれた、と目をぎらつかせる紅弥に、魔兔李は冷めた視線を向け

「うん、このままだと本家当主が動いてくれないみたいだからね。予定が狂うけど、君には先に死んでもらう事にするよ」

そうすれば本家当主もやる気出すでしょ、と悪意に満ちた笑みを浮かべた魔兔李に、愛羅は深いそうに顔を歪めた。

「そう簡単に殺られないよ。　　そうでしょ？紅弥」

「はっ、当たり前だ。俺が殺られるとか、有り得ねえな」

鼻で笑い高らかに告げられた言葉に、愛羅は満足そうに笑みを浮かべた。

その逆に、魔兔李は忌々しげに紅弥を睨み、ギリツ……と歯を噛んだ。

鬼達はそれぞれの獲物を紅弥と雷電へ振り下ろしたが二人はヒョイ

ツと軽く避けた。

「威力は上々、流石鬼。生半可な力じゃねえな」

「フン、幾ら獲物の威力が上々だろうと、使ってるのは雑魚鬼共だ」

幾分か冷静さを取り戻したのか、雷電はつまらなそうに言って紅弥の傍へ身を寄せ、守りの体制を取る。

「雷電、攻撃の手を止めたね」

「闇雲に攻めるより、主の傍で敵の様子を探るのが得策だと気付いたのだろ。漸く冷静さを取り戻したか」

「なら一先ず安心だな。闇雲に攻めていたときよりは優勢になるだろ」

冷静さを取り戻した雷電に、とりあえず安心する愛羅一同に、魔鬼李は鋭い殺気の籠った瞳で紅弥と雷電を睨み付けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3772/>

封蓮貴

2011年10月7日03時52分発行